シンポジウム
記録集

「百舌鳥・古市古墳群」世界遺産登録記念シンポジウム

世界文化遺産のあるまちへ グローイングアップ

「百舌鳥・古市古墳群」の過去・現在・未来

2021

羽曳野市教育委員会

例　言

本書は、令和元（2019）年10月6日に、羽曳野市立生活文化情報センター LICはびきので行われた「百舌鳥・古市古墳群」世界遺産登録記念シンポジウム「世界文化遺産のあるまちへ グローイングアップ －「百舌鳥・古市古墳群」の過去・現在・未来－」（主催：羽曳野市、四十四の会、NPO法人フィールドミュージアムトーク史遊会、羽曳野まち歩きガイドの会）の内容をもとにして作成しました。なお、講演者等の肩書は当時のものです。

本書を作成するにあたり、講演者の白石太一郎、禰宜田佳男、中井正幸、そしてパネラーとして参加していただいた谷水みさ子の諸氏からご理解、ご協力を頂戴しました。また、本文挿入写真の一部については、誉田八幡宮、和歌山県立紀伊風土記の丘、保田紀元氏よりご配慮をいただきました。

目　次

例　言

講演１　「百舌鳥・古市古墳群」とは何か
白石 太一郎（大阪府立近つ飛鳥博物館名誉館長）…1

講演２　史跡を活かしたまちデザイン－世界文化遺産のあるまち・羽曳野に期待すること－
禰宜田 佳男（大阪府立弥生文化博物館館長）…13

講演３　みんなで古墳再生大作戦－大垣市昼飯大塚古墳の整備と文化を活かしたまちづくり－
中井 正幸（岐阜県大垣市教育委員会 文化振興課課長）…31

パネルディスカッション
パネラー　白石 太一郎、禰宜田 佳男、中井 正幸、谷水 みさ子（四十四の会）
進行 伊藤 聖浩（羽曳野市教育委員会 文化財保護課参事）…47

表紙は古市古墳群の盟主墳である応神天皇陵古墳（誉田御廟山古墳）

【講演 1】「百舌鳥・古市古墳群」とは何か

白石 太一郎

ただいまご紹介いただきました白石でございます。皆さんよくご承知のように、市長さんからもお話がございましたが、本年 7 月に「百舌鳥・古市古墳群」が世界文化遺産として、正式に登録されました。これは、ひとえに大阪府、それからこの羽曳野市、藤井寺市、堺市からなる関係自治体の関係者の方々、さらにそれを支えられた市民の方々のご努力のたまものでありまして、私からも、改めてお祝いを申し上げたいと思います。

今日私に与えられましたテーマは、まず議論の口火を切るという意味で、「百舌鳥・古市古墳群」とは一体何なのかということで少し話をするようにということなんですが、実はこれ、なかなか難しい問題で、短時間で「百舌鳥・古市古墳群」とは何かということをお話しするのはなかなか荷が重い課題です。ただ、今回のシンポジウムのテーマである「世界文化遺産のあるまちへ グローイングアップ」ということで、これをいかに地元の今後の発展に生かしていくかということは、この地域にとってきわめて大切な問題です。市民の皆さまがこの古市古墳群の将来像を考えていただく上で、私の話が何らかの参考になれば幸いでございます。

1．列島最大と第二位の巨大前方後円墳を中心に形成された古墳群

それでまず 1 番目の問題ですが、それは「列島最大と第二位の巨大前方後円墳を中心に形成された古墳群である」ということにしておきました。

何といっても、この「百舌鳥・古市古墳群」の重要性は、日本列島で最大の、私どもは大仙陵古墳と呼んでおりますが、今回の登録では、「仁徳天皇陵古墳」ということになっております。皆さんよくご承知のように、これが日本列島最大の前方後円墳です。図 1 に宮内庁が作られました測量図をあげておきましたけれども、この墳丘の長さだけでも大体 500 メートルあるわけですね。その周りに三重の、水を満々とたたえた濠をめぐらしておりまして、さらにその外側にも、陪塚と呼んでおりますが、この古墳の中心的な被葬者と何らかの関係を持った人、

図 1　堺市 大仙陵古墳（現仁徳陵）

ないしは人を埋めた古墳ばかりじゃなくて、本来ならこの大仙陵古墳に埋めるべき副葬品だけを埋納したような古墳もあるわけです。この墳丘と周りの濠、それからそれぞれの堤ですね、それからその周りの陪塚が営まれた区域を含むと、これはどう少なく見積もっても、南北が1キロメートル、東西が800メートル、約1キロメートルという、とんでもなく大きな墳墓であるということになるわけです。

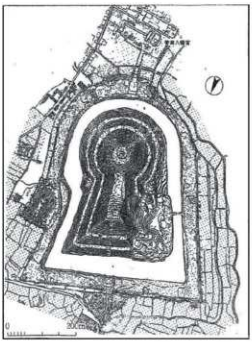


図2　羽曳野市 誉田御廟山古墳（現応神陵）

この大仙陵古墳を中心に形成されているのが、堺市の百舌鳥古墳群でありまして、それに対して、この古市古墳群の方は、図2、私どもは誉田御廟山（こんだごびょうやま）古墳と呼んでおりますが、現在応神天皇陵になっている古墳ですね、これが墳丘の長さは420メートルで大仙陵古墳より少し小さいわけですが、少し高さが高いといいますか、墳丘の体積でいえば、この大仙陵古墳よりも大きいんだということを、ご当地出身の梅原末治先生などが早くからいっておられました。

体積でいえば日本で最大の前方後円墳であるということになるわけですが、これを中心に形成されているのが、この古市古墳群にほかならないわけであります。何といってもまず「百舌鳥・古市古墳群」の重要性というのは、日本列島で最大の大仙陵古墳と、それから2番目に大きな、あるいは体積で言えば1番大きな、この誉田御廟山古墳を中心とする、まさに日本を代表する古墳群であるということになるわけであります。

それで、これまた皆さんよくご承知のことと思いますが、日本列島では、卑弥呼が亡くなる頃3世紀の中頃から、6世紀の終わりぐらいまで、大体350年の間、各地に大規模な古墳がたくさん造られます。それで、その中にはこういう前方後円墳、あるいは、後ろも四角、前も四角い前方後方墳もございますし、それから単なる円墳や方墳、それから帆立貝式古墳とか、様々な形の古墳があるわけであります。

数の上では、単なる円墳や方墳が圧倒的に多いわけであります。けれども、日本列島でこの古墳時代（先ほどいいました、3世紀中頃から6世紀の終わりぐらいまでを、考古学では古墳時代と呼んでおりますが）に造られました古墳を、墳丘の規模の順に並べてみると、実は第1位の堺市の大仙陵古墳を筆頭に、第47番目の古墳までがすべて前方後円墳です。1番目から47番目までは全部前方後円墳で、そしてようやく48番目に1基だけ、前方後方墳、後ろも四角、前も四角い前方後方墳が入ってきます。これは、奈良県の天理市にある西山古墳という、長さ190メートルあまりの前方後方墳なんですが、それが1基あり、そのあとまた前方後円墳がずらっと並ぶわけですね。ですからいいかえれば、この古墳時代、日本列島各地で営まれた古墳のうち、墳丘規模の大規模なものはほとんど前方後円墳だといっても差し支えないわけです。言い方を変えれば、古墳時代、各地の有力な支配者層が営んだ古墳は実は前方後円墳なんだと、そういうふうに申し上げてもよいわけであります。

この日本の古墳を特徴づける、日本列島独自の、こういう特異な形の古墳、これがどうして出てきたかということはよくわからないんですけれども、弥生時代の終わり頃から古墳時代の初めにかけて、こういう墳丘を持った四角い古墳、あるいは丸い古墳が日本列島にたくさん造られます。周りには、その土を取った跡でもあるんでしょうが、溝がめぐっているわけですね。溝の中に円形、丸い古墳、あるいは方形の古墳があるわけですが、溝の外からですね、墳丘に至る通路のようなものがくっついているわけですね。この通路の部分、溝の外から墳丘に至る通路状の部分が発達したのが、いわゆる前方後円墳の前方部、前方後方墳の前方部に当たるということが明らかにされているわけでありまして、もともと壺の形を模したとか、そういうことでは決してないわけです。

いずれにしてもこういう形の古墳が盛んに造られた時代が、古墳時代にほかならないということ、その最大規模の前方後円墳が、「百舌鳥・古市古墳群」にあるんだと、これが大切なことだと思います。

それからもう 1 つはですね、これは特に第二次大戦後の考古学的な研究の大きな成果と申し上げていいかと思うんですが、この古墳の造営ですね。前方後円墳を中心とする古墳の造営が、単にそういう特異な形のお墓づくりが流行した、というだけではないんです。

実はこの時代は、日本列島各地の有力な政治的首長たちが、この畿内の、近畿地方中央部のこの大和や河内、あるいは和泉の大首長といっていいかと思いますが、この大和や河内、和泉の大首長を中心に、政治連合を形成していた時代なんですね。これが、文献による古代史の先生方が「ヤマト政権」と呼ぶ、いわゆる首長連合の時代であったわけです。実はこのヤマト政権と呼ばれる、もちろん日本列島の南の端と北の端は入っておりませんけれども、汎列島的な政治連合の政治体制、政治秩序と密接な関係を持って営まれたのが、この古墳にほかならないということが、明らかにされているわけであります。

つまり古墳というものは、政治連合の政治秩序を表現しているわけです。いいかえれば、その政治連合の盟主といいますか、リーダーは、それぞれの時期で最大の古墳、それも前方後円墳を営んでいる。後に「大王」、「天皇」と呼ばれることになる、このヤマト政権の盟主が最大の古墳を造っているということになるわけです。そういうことで、これは 5 世紀の初頭から前半にかけてでありますけれども、この大仙陵古墳、あるいは誉田御廟山古墳が造営されるわけです。まさに、その日本列島の古墳を代表する前方後円墳の中でも、最大規模の前方後円墳を中心に形成されているのが、ご当地の古市古墳群と堺市の百舌鳥古墳群にほかならない、ということになるわけであります。したがって、まさにここには 5 世紀前半の日本列島最大の王墓がそれぞれ営まれている、ということになるわけです。これは、まず、やはり、この古墳群の最大の特質であろう、というふうに思うわけであります。

2．「河内政権論」を裏付ける唯一の物証

それから 2 番目に申し上げておきたいのは、「『河内政権論』を裏付ける唯一の物証」であるということです。

ご承知のように、日本の古代史で「河内政権論」という考え方があるわけです。図 3 をご覧いただきたいんですけれども、この図は、古墳時代、先ほどから申し上げておりますように、3 世紀の中頃から 6 世紀の終わりごろまでの 350 年間、この時代に、特に近畿地方中央部、いわゆる「畿内」と呼ばれる、ヤマト政権の政治や文化の中心であったと考えられる畿

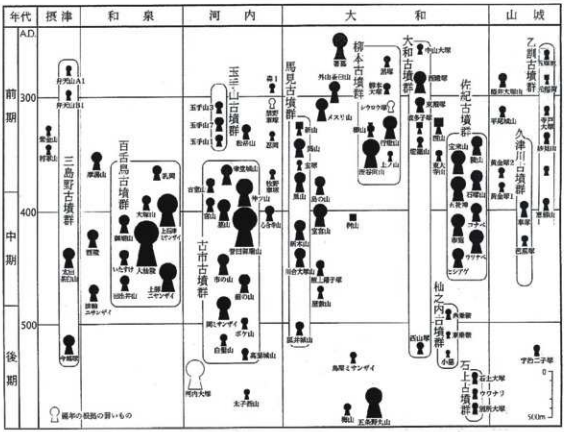


図3　畿内における大型古墳の編年

内地域で、営まれた墳丘の長さが 100 メートルを超えるような大きな古墳を年代的に整理したものです。上の方が古くて、下の方が新しくなるわけです。その図でもおわかりいただけるように、それぞれの時期、一番上が 3 世紀の半ば過ぎですが、それぞれの時期で他の地域の古墳と比べて、ずば抜けて大きな古墳が必ずあるわけですね。それが後に「大王」、「天皇」と呼ばれることになるヤマト政権のリーダー、盟主の墓であることはもう疑いえないわけです。これがいわゆる大王墓と私どもいっておりますが、大王の墓と考えられる。

その大王墓とおぼしき、隔絶した規模を持つ巨大な前方後円墳は、古い段階ではいずれも大和にあるわけですね。大和の、具体的には、1 番目が箸墓古墳。2 番目が、その右の方にある、漢字で書いた大和（おおやまと）古墳群の西殿塚古墳。3 番目が箸墓のすぐ下の外山（とび）茶臼山、桜井市の外山茶臼山、それから 4 番目がメスリ山。それから 5 番目が、その右の、天理市の柳本古墳群にあります、現在宮内庁が崇神天皇陵に決めている行燈山（あんどんやま）古墳。6 番目が、同じく宮内庁が景行天皇陵に決めている渋谷向山（しぶたにむかいやま）古墳、これは墳丘の長さが 310 メートルございまして、日本列島で古墳時代前期の最大の古墳です。いずれにしても、この初期の王墓とおぼしき大前方後円墳が 6 代にわたって奈良盆地の東南部、現在の天理市南部から桜井市地域にかけて、累々と営まれているわけです。この奈良盆地の東南部が、いわゆる本来の「やまと」と呼ばれた地域にほかなりませんが、いずれもそこに営まれているわけです。

ところが、なぜか 4 世紀の後半になりますと、この奈良盆地の東南部では大きな古墳は造られなくなってしまいます。それに代わって今度は、奈良盆地の北の端、後に平城京が営ま

れます地域の北のほうからさらにその北側の地、佐紀古墳群という、大きな古墳がこれまた累々と営まれた古墳群がありますけれど、その中に現れるわけです。その中に造られる。結論的に申しますと、この佐紀古墳群では、200 メートルを超える古墳がたくさんございますが、図3 では上の方に書いてある、宝来山（ほうらいさん）といった古墳もございます。これは、現在宮内庁が垂仁天皇陵に決めている古墳で、宮内庁の現在の測量図で測りますと 230 メートルぐらいなんですが、これは周りに水をたたえた濠で取り囲まれていて、その水位は、当然近世に農業用水として利用するため大幅に上がっているわけです。水位が上がるということは墳丘の長さが短くなっている。本来は、少なく見積もっても 240 メートルはあった大前方後円墳だと思います。これはどう考えても大王墓と考えざるをえない。それからその下に五社神（ごさし）古墳といいますが、これは神功（じんぐう）皇后陵に決められている古墳です。これは 270～80 メートルある大前方後円墳。少なくとも、まず間違いなく、この宝来山と、それから五社神古墳の二つが大王墓であることは疑いえないだろう。宝来山が箸墓から数えて 7 代目、五社神古墳が 8 代目の王墓であろうということになるわけです。私はそういうふうに申し上げましたけど、これはどなたがご検討いただいてもほぼ近い結論になる。研究者の中で、この古墳とこの古墳の前後関係は違うんじゃないかなど、若干意見の相違はありますが、大体研究者のどなたが選ばれても、この 8 基を選ばれると思います。いずれにしても、箸墓から数えて 8 代目までの倭国王のお墓は、いずれも奈良盆地に営まれているわけです。

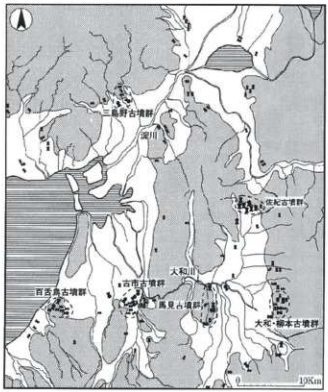


図 4　近畿中央部における大型古墳の分布

ところが、この 4 世紀の終わり、西暦 300 年代の終わりぐらいになると状況が変わってくるわけです。この佐紀古墳群では、その後の 5 世紀代になりましても、その図 3 にありますように、コナベ古墳、市庭古墳、ウワナベ古墳、ヒシアゲ古墳と大きな前方後円墳が累々と造られますが、ところがこの段階、4 世紀末葉以降になると、もっと大きな古墳が、その左側のところ、この河内や和泉に現れるわけです。これが、河内のこの古市古墳群と、和泉の百舌鳥古墳群にほかならないわけです。具体的には、おそらく箸墓から数えて 8 代目が、先ほどいいました佐紀古墳群の五社神古墳です。そしてその次、9 代目が、この古市古墳群の仲津山古墳、現在宮内庁が応神天皇のお妃の仲津姫のご陵に決めている古墳で、これは墳丘の長さが 286 メートルあります。これがおそらく、大阪平野に最初に造られた大王墓だと思いますけれども、これが箸墓から数えて 9 代目です。その次は、今度は百舌鳥古墳群の方に移りまして、そこに上石津ミサンザイ古墳と書いてありますが、現在宮内庁が履中天皇陵

に決めているんですね。これは墳丘の長さが365メートル、日本で3番目に大きな大前方後円墳ですが、これがおそらく仲津山古墳の次に来るのでしょう。箸墓から数えて10代目です。それからその次が、また古市に戻ります。5世紀代の初め、誉田御廟山古墳、すなわち応神天皇陵古墳です。墳丘の長さが420メートルございまして、これが、おそらく、上石津ミサンザイ古墳に次いで造られた11代目の倭国王のお墓だろう。その次、今度はまたこれがなぜか百舌鳥の方に移るわけです。この大仙陵古墳、墳丘の長さが最近の調査では500メートルは下らないだろうと考えられておりますけれども、これが、箸墓から数えて12代目に来るということです。いずれにしても、4世紀の終わりから5世紀になると、大王の墓と考えざるをえないような隔絶した規模を持つ大前方後円墳は、奈良盆地から離れてこの大阪平野南部の、古市古墳群や百舌鳥古墳群に営まれるようになるわけであります。

図5　古市古墳群

図6　百舌鳥古墳群

問題は、一体これをどう理解するかということです。それまでずっと奈良盆地に営まれてきた大王のお墓が、4世紀末から5世紀になると大阪平野南部のこの百舌鳥や古市に造られるようになる。これをどう考えるか。これについては、現在、考古学、あるいは古代史の研究者の中でも意見が分かれています。大きく二つの考え方に分かれているわけです。

一つは、これはあくまでも奈良盆地の南の方に本拠を置く大王家といっていいかと思うんですが、ヤマト王権が、単にお墓だけを、何らかの理由で大阪平野に移したんだろうという考え方ですね。そう考える研究者も決して少なくはないわけです。

それに対して私どもは違った意見を持っておりまして、そもそも古墳というのは一体ど

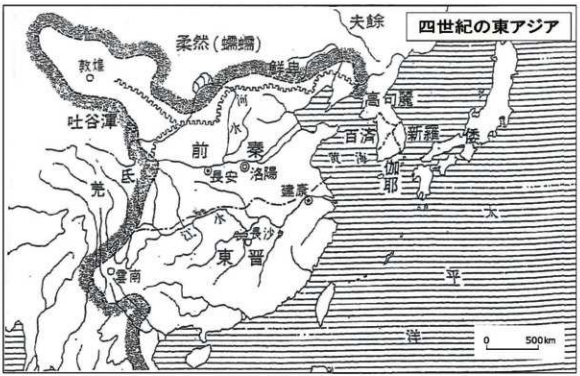


図7　4世紀の東アジア

こに造られるのか。『日本書紀』などを見ましても、古墳というのは、その政治勢力の本拠地に営まれるものであったことは、これは疑うことができないというふうに、私どもは思うわけです。これはいろいろな例があります。それを逐一お話ししている時間はございませんが、結論的に、古墳というのは、やはりその政治勢力の本拠地、本貫地に造られるものであったことは疑いえないだろうと思うわけです。ということであれば、大阪平野南部の百舌鳥や古市に大王墓が造られるようになるということは、とりもなおさず大阪平野南部の勢力が王権を掌握した結果にほかならない、ということになるわけであります。

実はこれは、その時代、この4世紀後半の東アジアの国際情勢を少し検討いたしますと、容易に理解できる出来事だというふうに私は思っております。それはどういうことかと申しますと、これまた皆さんよくご承知の通り、4世紀という時代の東アジアは大変な動乱期です。中国の西や北の方にいた、五胡と呼ばれる遊牧騎馬系民族が大挙して、中国本土に侵入してくるわけです。当時の中国は晋という王朝ですが、晋は、北半分を遊牧騎馬系民族に奪われて南に落ち延びて、そして都を今の南京、建康に移して、中国の南半分を支配するにすぎなくなるわけです。いわゆる南北朝時代が、それから約270年間続くことになるわけです。

あまりわかりやすい図ではありませんが、図7に、4世紀の東アジアの図をあげておきましたけれども、この段階では、中国の北半分は前秦という、遊牧騎馬系の民族の国が支配して、漢人の王朝は南半分を支配するにすぎず、これが東晋です。いずれにしても南北朝に分裂するわけです。

そしてその影響は、中国大陸だけにとどまらず、朝鮮半島にも及んでくるわけです。遊牧騎馬系民族であった五胡の一つで鮮卑族というのがいるわけですが、その鮮卑が、北燕という国を4世紀の中頃に建てるわけですが、この北燕が、朝鮮半島の北部から中国の東北部に

大きな力を持っていた高句麗を攻めて、この高句麗に大打撃を与えるわけです。高句麗は、多くの領土や人民を鮮卑の北燕に奪われ、大打撃を受けるわけです。そして、それ以降高句麗は、北で失ったものを南で回復するということで、積極的に南下策を進めるようになる。朝鮮半島の南にあった百済や新羅は、まさに国家存亡の危機を迎えるわけです。

この時、新羅は強力な騎馬軍団を持つ高句麗には到底対抗できないということで、早くに高句麗に下って、何とか生き延びようとする。それに対して、百済はあくまでも軍事力で高句麗と対決しようとするわけですが、このとき百済が目をつけたのが倭国でした。当時の倭国は、文化程度はまだ遅れているわけですが、『魏志』倭人伝などをみてもわかりますけれども、人口は結構いたようですね。百済は、倭国に目をつけて、これを味方に引き入れて高句麗と戦おうとするわけです。

当時の倭国は、鉄資源をはじめとする先進的な文物を全部朝鮮半島に頼っておりますから、そういうこともあって、当時の倭国は百済の誘いに乗って、百済と倭国の間に同盟が成立するわけです。このことを物語る一つの証拠は、この時、百済と倭国の同盟の成立を祝って、百済の王家が倭国王権に送ったプレゼントがあるわけです。今も奈良県の天理市の石上（いそのかみ）神宮に伝えられている七支刀という、先が七本に分かれた変な形の剣がございます。これが、銘文の細かい解釈は別にして、この時代、百済王家から倭国王権に送られたものであるという解釈については意見がみんな一致しておるわけで、そういう七支刀の存在からも、疑うことはできません。いずれにしても、この倭国も、東アジアの国際情勢の大きな変化に巻き込まれることになるわけです。

ところが、4 世紀の中頃から半ば過ぎ、倭国の王墓はまだ奈良盆地の東南部に営まれているわけです。要するに 4 世紀の中頃から半ば過ぎ、これはいわゆる、卑弥呼の支配していた邪馬台国時代以来の流れをくむ、初期のヤマトの王権が続いていたわけでありますが、こういう非常に古い、邪馬台国段階以来の、きわめて宗教的、あるいは呪術的な性格の強い王権では、そういう新しい東アジア情勢の大きな変化に対応することは到底できなかった、と私は思うんです。邪馬台国時代以来、畿内勢力の中では、この大阪湾岸の和泉北部の勢力、あるいは河内平野中心部には河内湖という大きな湖があり、この河内湖周辺の中河内、南河内の勢力が朝鮮半島との交渉・交易を担当していたわけです。ところが、東アジアの国際情勢の大きな変化にともなって、これら河内や和泉北部の勢力が倭国の政治のリーダーシップを握るようになるのは、むしろ当然のことだと思うわけです。

そういうことで、当時の東アジア情勢の大きな変化を見ますと、王権の中枢が、大和勢力に代わって、大阪平野南部の河内南部や和泉北部の勢力に取って代わったということは、十分納得できるわけです。私は、そういうことで、私だけではありませんが、この、4 世紀の末葉から 5 世紀になると、ヤマト王権の中枢は、大阪平野南部の勢力がこれを握るようになったものと考えていいだろうと思います。これをいわゆる「河内政権論」といっているわけです。そういう考え方をとる考古学、あるいは歴史学の研究者も少なくないわけですけれども、その唯一の物証はまさにこの「百舌鳥・古市古墳群」にほかならないということになるわけであります。これは、日本の古代王権の本質を考える上に非常に重要なことだと思います。

ただ、これについては、いわゆる三輪王朝から河内王朝への王朝の交代であるとか、そういうふうにお考えの先生方もおられますけれども、これは、中国における、秦が漢王朝に交

代した、そういう王朝の交代とは、私は性格が全く違うものだと思っております。先ほどもちょっと触れましたけれども、この時代というのは、日本列島各地の政治勢力は、この畿内の大和や河内の勢力を中心に政治連合を形成していた時代なんです。これは、その盟主権が交代しうるから、連合政権なんですね。これはあくまでも、その首長連合体制のもとにおける、中心勢力の交代にほかならないのであって、王朝の交代というようなものとは、性格が違うんだろうというふうに思っております。

それから、なおついでに申しておきますと、一つ面白いのは、奈良盆地の勢力が最初王権を握っていたんですね。それが 4 世紀の終わりから 5 世紀になると大阪平野の勢力に変わるわけですけれども、そしてそれは今私が申しましたように、決して王朝の交代というようなものではなくて、当時の政治体制がそういうものである。「政治連合」の世界で、盟主権は交代しうるものであったというふうに考えているわけであります。

文献による古代史の井上光貞先生が非常に早い段階にもう書いておられるんですけれども、井上先生は、河内政権の最初のリーダーは応神天皇だと考えておられたわけです。応神天皇は、『古事記』、『日本書紀』の系譜によると、男系ではそれ以前のヤマトの王統とはつながっていない。その奥さんである仲津姫が、古い、『古事記』や『日本書紀』でいえば、崇神、垂仁天皇の辺りの天皇と系譜的につながっている。ですから、応神は入り婿の形でヤマトの王家とつながっているんだということを明確に指摘しておられます。私は、それは事実に近いのではないかと思っております。

これはもうちょっと新しくなりますが、6 世紀の前半に継体天皇が出てこられるわけです。継体天皇は、『古事記』、『日本書紀』では応神の 5 世の孫となっておりますが、これは古代史の先生方どなたも認められない。継体がどこから出てきたかは別にして、ともかく、それ以前の王統とつながっていないことは間違いない。ところが継体も、応神、仁徳の血を受け継いでいる仁賢天皇の娘さんである手白香皇女（たしらかこうじょ）をめとって、婚姻関係を結んでいるわけです。ということは、継体もまた、入り婿の形で、それ以前の王統とつながっているわけです。そういうことで、非常に面白いのは、王統は決して断絶していないということで、ともかくつながっているという、これはもう日本の古代王権の非常に面白いところではないかというふうに思っております。

いずれにしても、この「河内政権論」というものがあるわけで、私は基本的にはこれは成り立ちうる学説だと思っておりますけれども、それの唯一の物証が、まさにこの「百舌鳥・古市古墳群」そのものにほかならないということです。

3．倭国の文明化を象徴する歴史的記念物

それから、先ほど当時の東アジア情勢について一部お話し申し上げましたけれども、もう一つこの「百舌鳥・古市古墳群」の重要なことは、「倭国の文明化を象徴する歴史的記念物」にほかならないのではないかということです。

いずれにしても、百済と同盟を結んで高句麗と戦うわけですが、高句麗と戦うといっても、当時の倭国には馬がいなかった。当然倭人たちは、騎馬戦術を知らなかったんです。これでは、朝鮮半島に渡って強力な騎馬軍団を持つ高句麗と戦うといっても戦えないわけですね。このことは、当然百済もわかっているわけで、百済は自国の存亡がかかっておりますから、すぐれた馬を生産する技術、牧を作って馬を生産する技術、それからその馬に乗るために必

要な馬具を生産する技術、それを持ったたすぐれた技術者たちをたくさん倭国に送って、倭人たちに教えるわけです。これは百済だけじゃなくて、百済の影響下にあった伽耶諸国、日本列島に一番近い、小国が分立していた伽耶諸国も、多くの技術者を倭国に送って、倭人たちにそういう技術を教えてくれるわけです。

よくおわかりのように、馬具の生産技術というのは、木工、鉄工、それからその他金銅技術などの金属加工技術、あるいは皮革の技術、それから織物技術などの総合技術です。そういうすぐれた技術を持った人がたくさん海を渡ってくる。当然彼らは馬の文化に関わる技術だけじゃなくて、それに関連する様々な技術を、その他土木技術、建築技術、焼き物の技術などの様々な技術を、当然倭人たちに伝えるわけです。これは、狭い意味の技術にとどまらないで、例えば文字の使用をはじめとする様々な文化、学術や思想などが倭人たちに伝えられることになったということです。そういうことで、倭国がようやくこの段階を経て、東アジアの文明社会の仲間入りをすることができた。それがまさに、この 4 世紀の末葉から 5 世紀の前半という時代にほかなりません。

写真 1　羽曳野市 誉田丸山古墳出土の金銅製鞍金具（1 号鞍）
上：前輪　幅 42.9cm　下：後輪　幅 51.9cm
（国宝、誉田八幡宮蔵）

そして、実はこの日本の文明化を象徴するのが、ものとしては馬具なんですが、写真 1 でお示ししています、古市古墳群の応神天皇陵古墳の陪塚である誉田丸山古墳というのが、その前方部のすぐ前にありますが、この誉田丸山古墳から出てきた馬具です。見事な金銅製の透かし彫りの装飾を施した、鞍金具を持った馬具が 2 セット出てきているわけです。副葬されていたということなんですけれども、これが現在も誉田八幡宮の宝物殿に保存されております。

実は、奈良盆地の 3 世紀後半から 4 世紀代の王墓から馬具は全く出てこないわけです。そして 4 世紀の終わりから 5 世紀になって、この、誉田御廟山古墳の陪塚である丸山古墳と、それからもう一つ、百舌鳥古墳群では、現在の履中天皇陵古墳である上石津ミサンザイ古墳の陪塚である七観古墳というのから、これはもうちょっと古いんですけど、4 世紀の終わりないし 5 世紀初頭の、やはり見事な馬具がセットで出てきているわけです。

要するに、日本の王墓に馬具が副葬されるようになるのは、「百舌鳥・古市古墳群」からなんです。これこそまさに、古代日本がようやく東アジアの文明社会の仲間入りしたことを

示す、象徴的な資料であろうというふうに思っているわけでありまして、そういう意味で、まさにこの両古墳群こそは、倭国の文明化を象徴する歴史的記念物にほかならないというふうに申し上げていいんではないかというふうに思っております。

4．誉田御廟山古墳と「応神天皇陵」

写真2　誉田御廟山古墳（応神天皇陵古墳）

それからもう一つは、もう時間がなくなりましたので結論だけを申しますが、そもそもこういう古墳の被葬者を決めるというのは非常に難しい。私どもも、大学でも、古墳の被葬者なんていうのは、ここに誰を埋めたと書いた墓誌でも出てこない限り決めることはできないんだということを教えられました。まさにそれは原則的にはその通りだと思いますが、ただ、例外もあるわけです。私は、その例外がこの古市古墳群の盟主墳である誉田御廟山古墳であり、百舌鳥古墳群の盟主墳である大仙陵であろうと思っております。

これは、大正年間の初めに京都大学やあるいは当時の東北帝国大学で教鞭をとられた喜田貞吉先生が早くに指摘しておられたことなんです。喜田先生は、「古墳墓年代の研究」というすぐれた論文をお書きになりました。この中で、結論的に申しますと、応神天皇陵のすぐ南側には、皆さんご承知のように誉田八幡宮があるわけです。応神天皇とそのお母さんである神功皇后をお祀りする誉田八幡宮。これが 11 世紀の中頃、平安時代の中頃には成立していることは疑いえないわけです。そういうことから、11 世紀のこの平安時代の中頃に応神天皇の墓がわからなくなっていたなんてことはちょっと考えられないわけですから、その時代に、誉田御廟山古墳こそが応神天皇陵と考えられていたことは疑いえないということから、応神陵はまず間違いないだろうということを論文に書いておられるわけです。

ただしこれは、文献の先生がそう考えておられるだけなんで、考古学の立場からはやはり古墳の考古学的な年代研究というのが必要です。結論を申しますと、最近のこの時期の古墳に関する年代研究の成果から考えても、誉田御廟山古墳が、5 世紀の初頭、5 世紀の第 1 四半期のものであることはまず疑いえないわけです。応神天皇が活躍されたのは、古代史の先生方の研究によると、4 世紀の末から 5 世紀の初め、5 世紀初頭にかけてであることが明らかにされています。そうすると年代がぴったり合うわけです。そういうことから私は、この喜田説は、今でも認めていいだろうと思っています。応神天皇陵は、すでに平安時代の中頃に、そのすぐ南の隣接地に、応神天皇を祭神とする誉田八幡宮が存在するわけですから、そして考古学的な年代観も一致しているわけですから、応神陵を疑うのは極めて難しいと。この応神陵がよいとすると、考古学の研究成果からは応神天皇陵の次の大王墓はどう考えてもこれは、大仙陵古墳です。だから、応神陵がよければ仁徳陵もよいと考えざるをえないというふうに私は思っております。

ただ申し上げておかないといけないのは、そう簡単にこの時期の古墳の被葬者を決めら

れないということです。『古事記』、『日本書紀』には、百舌鳥には仁徳天皇とそのお子様の履中天皇と履中の弟の反正天皇の 3 代にわたって百舌鳥に陵墓が作られた、と書かれています。このうちの、大仙陵古墳を仁徳陵と考えていいというのは、それはそれでいいんですが、実は、この百舌鳥古墳群には、大仙陵古墳よりも古い古墳があるわけです。それは、現在宮内庁が履中天皇陵に決めている上石津ミサンザイ古墳です。仁徳天皇のお子様のお墓となっていますが、年代は逆なんです。大仙陵古墳よりも、上石津ミサンザイ古墳の方が古い埴輪を出しています。そうすると、上石津ミサンザイ古墳が一体誰の墓かということが説明つかなくなるわけです。それから何よりも、先ほど申しましたように、この時期、4 世紀末から 5 世紀の初めにかけての時期、大王墓は、古市、百舌鳥、古市、百舌鳥と交互に営まれています。この時期に 3 代続いて百舌鳥に王墓が営まれたということは、考古学的には考えられないわけです。

そういうことから、この時期の王墓の被葬者を決めるのは極めて難しい。そう簡単なことではないのです。ただそうした中で、たまたま、誉田八幡宮が存在するということから、応神天皇陵が間違いなさそうだと。それがよければ、大仙陵が仁徳陵である可能性も極めて大きい、その蓋然性が極めて大きいということは想定できるんだということです。これは私どもにとっては非常にありがたいことだというふうに思っているわけであります。

他にも少し申し上げたいことがあったんですが、もう時間が来てしまいましたのでここまでにしておきます。「百舌鳥・古市古墳群」について申し上げないといけないことはまだまだたくさんあるんですけれども、少なくとも、今申し上げましたように、それが列島最大と列島で 2 番目に大きな前方後円墳を、それぞれ中心に形成された古墳群であるということ。そしてそれが、いわゆる「河内政権論」というものを裏付ける唯一の物証にほかならないということ。それからまた、それは古代における倭国の文明化、これを象徴する、歴史的記念物なんだということです。それからこれは非常にありがたいことですけれども、それぞれの盟主墳、誉田御廟山古墳、それから大仙陵古墳については、あくまでも蓋然性の問題ですけれども、その盟主墳の被葬者をほぼ想定することができる、極めて珍しい大型古墳群であるということを申し上げておきたいと思います。

どうも、まとまりのない話を最後までご清聴くださいまして、ありがとうございます。私の話はここまでにしておきます。

【講演 2】史跡を活かしたまちデザイン
－世界文化遺産のあるまち・羽曳野に期待すること－

禰宜田 佳男

こんにちは。ただいまご紹介に預かりました、大阪府立弥生文化博物館の館長の禰宜田と申します。

今日は、「史跡を活かしたまちデザイン」ということで、講演をさせていただきます。こういうまちづくりという大きなテーマで話をする機会はなく、どういう話にしようかとかなり悩んだんですけれども、これから、そのことについて、お話ししたいと思います。

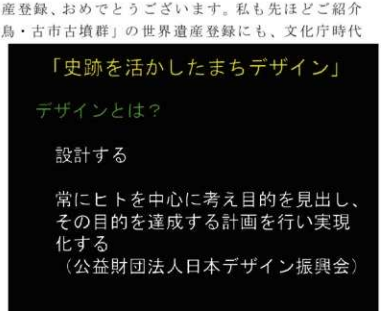
今日の講演ですけれども、まずは与えられた課題がまちデザインということですのでデザインについての総括的なこと、次にイギリスでの世界遺産に関する経験についての話をして、それから世界遺産になった羽曳野のまちを歩いて思ったことに触れ、最後に講演の核心である古墳を活かしたまちデザインについて考え、最後にまとめをする、というような構成とさせていただきます。

1．史跡を活かしたまちデザイン

では、「史跡を活かしたまちデザイン」という今日のお話のタイトルにもかかわることに移ります。

申し遅れましたが、世界遺産登録、おめでとうございます。私も先ほどご紹介がありましたが、この「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録にも、文化庁時代に関わることがありましたので、個人的に非常に喜んだ登録であるということもあわせて申し添えさせていただきたいと思います。

その「史跡を活かしたまちデザイン」ということについてのお話しです。まずは「デザイン」という言葉なんですが、なかなか考古学の人間は考える機会がありません。このタイトルは、後でシンポジウムの司会をさ



スライド１　「史跡を活かしたまちデザイン」

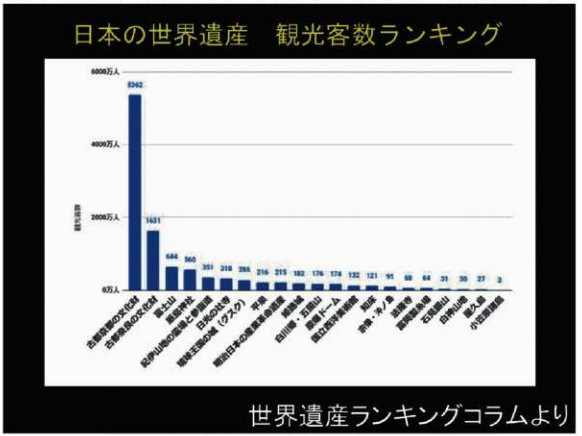
れる、伊藤さんからこれで話をしてくれって言われたのです。

本題に先立ち、まず「デザイン」って何なのだろうというところから考えましょう。「設計する」っていうのはちょっとなじまないなということで、インターネットでいろいろ検索をしてみました。すると、一つだけ今回の報告に関わるかなあという定義を知りました。今日の話ではこれを使おうと思います。

その定義とは、「常にヒトを中心に考えて目的を見いだし、その目的を達成する計画を行い、実現化する」というものです。これは公益財団法人日本デザイン振興会のホームページから引用してきたんですが、「デザイン」には人のことを考えて目的を設定し、その目的達成のために何らかの計画を立て、実現する、という意味があるということです（スライド１）。

今日の私の話でもそうですし、後半のシンポジウムでも当てはまることになるのではないのかなというふうに思います。まずこのことを確認させていただきたいと思います。

さて、世界遺産登録になりますと、多くの地元の方々は、観光客が増えて、地元が活性化するんじゃないかと期待しておられると思います。これは間違いなく、実際に登録後に観光客が増加するという現象はあるだろうと思います。ただし、それは一過性のものであるということも、忘れてはいけないということです。これは過去の登録の例を見ても明らかで、「世界遺産ランキングコラム」というところから引っ張ってきたのですが、「古都京都の文化財」に 5,300 万人とか、「古都奈良の文化財」に 1,600 万人とか、すごく多くの観光客が訪れてい



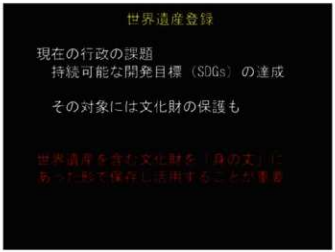
スライド２　「日本の世界遺産　観光客数ランキング」

るということがわかります。こういうランキング形式の資料を使うと、世界遺産に行く人が多い少ないということを気にしますよね。本当は、これがよくないと思うんですが、現実がどうなのかっていうことを知っていただくために提示させていただきました。本来は、来訪者数を「北から」示すなど、いろんな提示の仕方があるはずだと思います。いずれにしても、日本で自然遺産を含めて世界遺産に登録されると、小笠原を除けば、数十万人以上の観光客の方々が来ています。「宗像・沖ノ島」91 万人、「石見銀山」31 万人など、考古遺跡を構成資産にして世界遺産になったところでも、このような数字になっています（スライド 2）。

こういうデータがありますから、世界遺産に登録されたことで観光への期待っていうこともあるでしょう。しかし、それは一過性のもので、すぐにその数が減少に転じることも忘れてはいけません。

それはそれとして、ここで、現在行政が抱えている課題として持続可能な開発目標、「SDGs」があるということをお知らせしておきたいと思います（スライド 3）。

世界遺産を含む文化財も、これに沿って保存・活用をしていくことになりますので、身の丈にあった形での保存・活用が重要だということになります。



スライド 3　「世界遺産登録」

スライド 4　「SDGs 目標 1～6」

スライド 5　「SDGs 目標 7～12」

その SDGs ですが、17 の課題があって、それを目標達成していく取り組みが求

められています。2015年の国連サミットで採択されたもので、15年かけて世界各国はこのことについて取り組んでいくのです。「貧困をなくそう」とか、「安全な水とトイレを世界中に」とかいう目標、「住み続けられるまちづくり」を行ない、「つくる責任　つかう責任」を果していくという目標もあります。気候変動にも対応していかなければならないとされています。海の豊かさも守っていかなければなりませんし、いろんな課題があるわけです。次の世代に今の地球を守っていってもらう、そのために、今我々が何をしなければいけないのかという課題が示されているわけです（スライド4）。

この中には、世界の文化遺産及び自然遺産の保護、保全の努力を強化するんだということが、11番目の「住み続けられるまちづくりを」というところで書かれています。ですから、行政はもちろん、世界のみんながこれについて取り組んでいかなければならない課題だということです（スライド5）。

こういう大前提の中で「百舌鳥・古市古墳群」をどうしていくのかを考えることになるのです。

2．イギリスでの経験

ここで、次の話になります。世界遺産についてイギリスでの経験を二つ紹介しておきたいと思います。まずは「ストーンヘンジ」ですね。場所は、大ブリテン島の南です（スライド6）。

皆さん方も、名前はご承知のことだろうと思いますけれども、ストーンサー

スライド6　「ストーンヘンジ（位置）」

スライド７　「ストーンヘンジ（資産本体）」

クルです。紀元前 2500 年から 2000 年頃まで機能していた、直径 100 メートル、高さ 4～5 メートルの巨石群からなっています（スライド７）。1986 年に世界遺産に登録されました。行かれた方もおられると思います。ここの芝生で寝転んだら気持ちいいですよ。座り込んで絵を描いておられる方をはじめ、いろんな楽しみ方をしている人を見ました（スライド８）。行ってみたい世界遺産の中では、けっこう上位にランクされているのではないのかなと思います。

これはビジターセンター、ガイダンス施設です。この中には展示施設とカフェがあります（スライド９）。ストーンヘンジを見る前後に、ビジターセンターで発掘資料・模型・映像などで遺跡のことを勉強でき、ご飯を食べ、お土産を買うことができるのです（スライド 10・11）。あのような巨石をどうやって建てたのかという疑問もありますよね。藤井寺市で出た修羅のようなソリで運んだことを屋外で

スライド８　「ストーンヘンジ（スケッチをしている人）」

スライド９　「ストーンヘンジ（ビジターセンター）」

スライド 10・11　「ストーンヘンジ（ビジターセンター）」

スライド 12・13　「ストーンヘンジ（ビジターセンター）」

示しています（スライド 12）。現地とは 1.5km ほど離れていますので、移動には車が必要です（以前は左上のような特別な車で移動していたが、2020 年 2 月の訪問時はバスになっていた）（スライド 13）。

ストーンヘンジでは、遺跡自体とビジターセンターによって、観光客は学び楽しむことができるようになっているのです。

そういう世界遺産に対して、もう一つ、「ダーウエント峡谷の工場群」という世界遺産がありまして、その紹介をしたいと思います。場所は、さっきのストーンヘンジから少し北の方です（スライド 14）。

これは産業革命に関する紡績工場の遺産です。日本で言うと、富岡製糸場に近いもので、アークライトが発明した、水力を使った紡績機を備えた工場群です。現在につながる大規模な工場施設での生産のスタートがこのダーウエント峡谷の工場群であるということで、2001 年に世界遺産に登録されました。資産はこのような建物になるわけですね。近くには川があって、この水力を使って、機械を動かすということになっていました（スライド 15）。

印象深かったことがあります。もう 8 年前ですが、この資産に行こうとしたわけです。カーナビに従って探したわけです。ところが、道路にも世界遺産を示すサインとかが見当たらないんですよ。それでツーリストインフォメーションにも行ったんです。いろんなパンフレットがたくさん並んでいたんですけど、

スライド 14 「ダーウエント峡谷の工場群」

その中でも世界遺産だからということで目立つところになかったのです。いろんな観光地の中の一つという形でパンフレットは置かれていました（スライド 16）。ようやくの思いでパンフレットを入手したのですが、モタモタしたのは私の英語能力に問題があったからではなく、わかりやすいところに置いていなかったからだと思っています。

こうして、やっとのことで現地に到着したのです。建物の外観はこのようなものです（スライド 17）。建物の中はこんな感じです（スライド 18）。博物館の方には糸巻きが 68 万個もありました。これは圧巻で、その数に圧倒されました。すごかったです（スライド 19）。

スライド 15 「ダーウエント峡谷の工場群」

スライド 16 「ダーウエント峡谷の工場群（町のインフォメーションツーリスト）」

スライド 17 「ダーウエント峡谷の工場群」

スライド 18 「ダーウエント峡谷の工場群（工場内の様子）」

スライド 19 「ダーウエント峡谷の工場群（博物館内の糸巻き）」

二つの事例だけですが世界遺産への対応について、イギリスに行って感じたことは、世界遺産というのは大きなブランドですけれども、国内外の観光客に対応するような形で整備されているところと、特別なことをしてないところ、もちろん断定はできないわけですが、そう見えたところがあったことをまず確認をしておきたいと思います。日本では考えられないことです。

3．世界遺産のあるまちを歩いて

そういう中で、羽曳野市域を歩かせていただきました。古市駅を降りましたら、古市古墳群に関する観光案内施設が二つあり、非常に親切に対応していただきました。そのあといくつかの古墳を見て、ご飯も食べて一日過ごさせていただきました。

その時の感想ですが、まずは応神天皇陵古墳外濠外堤、これがよく史跡になったなというふうに思いました。我々の先輩方がそういう判断をしてくれたってこと、素晴らしいことだと思いましたね。1970年代の後半に、古墳の外濠外堤の部分に開発計画が起こったのです。それに伴って、この部分の保存について、最初は宮内庁と調整したようです。古墳の墳丘と周濠・周堤は一体のものだから、陵墓として管理している部分に追加できないかという調整をしたみたいなんですけども、それは難しいという判断があったのです。それならば文化財として保存するしか選択肢はないということで、府と市で保存する方向性が示され、文化庁も外濠外堤の部分だけを史跡に指定することにしたのです。しかし、古墳の価値の枢要の部分である墳丘を含まない史跡指定ですから、理屈は簡単ではなかったと推測します。いずれにしても、こうして、現在に至ったわけです。この判断は、本当に素晴らしいことだったと思うんです。

指定された外堤は直線距離にして425m。400mを超える古墳の施設を、真横から見ることができるんです。これ、さっきの白石先生のお話でも出ましたが、墳丘長でもっとも長大な仁徳天皇陵古墳の場合、宅地が間際まで迫っています。超巨大前方後円墳を真横から、何の邪魔もなく一望できるのは、ここしかないのです。これは素晴らしいことだと思います。圧巻という言葉しかないですね（スライド20）。このことは、もっとアピールをしていっていただきたいです。話に聞きますと、この空間はコスモスや菜の花を植えているようですね。いい取り組みです。こういう活動は、ぜひ、今後も引き続きやっていただきたいと思います。

スライド20　「史跡応神天皇陵古墳外濠外堤」

スライド21　「地元の方々の取り組み（食）」

スライド22　「地元の方々の取り組み（体験・グッズ販売）」

次は食についてです。この中にも、このような前方後円形のキッシュでしたかね、食べられたことのある方もいらっしゃると思います。私も無理言って注文し食べました。美味しかったです。ナイフで切ったら、作り話ではなく、湯気が「フワァーッ」と出てきました。ここの店のアピールだけをしてはいけませんけど、美味しかったですね。その近くには、古墳と関わりを持たせたパン屋さんもありました。これですね。埴輪だとやっぱり、通称「踊る埴輪」を素材にした、これになっちゃいますね。「踊る埴輪」は、関西ではないんですけどね（スライド21）。

また、このような、埴輪づくり体験ができ、お土産など古墳グッズを売るショップもすでにあります。実物よりも小さいですが埴輪づくり体験ができ、古市古墳群に来た記念になるグッズ販売もなされています。こうした空間が地元の方々の力で確保されていました。素晴らしいことです（スライド22）。

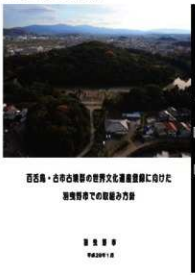
そういえばこの会場の向かいにも、ありましたね。レストランが。昼ご飯食べに行かれた方はいらっしゃいますか？あ、いらっしゃいますね。ありがとうございます。私がありがとうございますって言うのも、おかしいですけどね。

このような形で、地元のいろんな方々が、すでに古市古墳群と関わっていただいています。おそらく、「百舌鳥・古市古墳群」が世界遺産になってよかったなと思ってもらっているでしょう。いいことですね。

4．古墳を活かしたまちデザインを考える

では、ようやく本題に入ります。古墳を活かしたまちデザインを考えるということについてお話ししたいと思います。

すでに世界遺産登録の前に、羽曳野市では、古市古墳群の中でも羽曳野市域のものをどうするかということについては、『百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録に向けた羽曳野市での取組み方針』という冊子を作っておられます。古墳群の周遊ルート、ボランティアの方との関わり、応神天皇陵古墳のところでも触れましたが古墳の視点場の設定のこと、ガイダンス施設のあり方なども、この中で書かれています（スライド 23）。



スライド 23　「羽曳野市の取組み方針」

でも、これは「登録に向けた」取り組み方針です。おそらくこれから市の方では、さらに具体的に話を進められるんではないかと思います。そこで、改めて確認をしたいことは、世界遺産登録はゴール、到達点では決してないということです。スタートラインに立って走り出したところなんだ、ということです。

次に、画面では「未来永劫・・・」などと書いています。オーバーですが、地球が存在する限り、日本国が存在する限りという重い意味で書いているんです。史跡として、世界遺産として、そのような理念で保護していくべきものなんですよということです。そういうふうに言うと重荷に感じてしまうとちょっと困るんです。全国には、史跡がなくて、史跡を持ちたいということで、頑張って調査研究をしている市町村はたくさんあるのです。それが、羽曳野市の場合は世界遺産ですよ。世界遺産を持っていて、その保護ができるわけです。そういうことのできる市町村は全国でも、ほんの一握りです。全国の市町村の数は約 1600 ですが、おそらくその中の 30 とか 40 ぐらいでしょうか、それくらい少ししか世界遺産には関わることはできないわけです。このことをまず、確認をしておきたいと思います（スライド 24）。

改めて確認すること

百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録

ゴール到達ではない
スタートラインに立ち走り出したところ

未来永劫、史跡・世界遺産として保護

これができる市町村は全国的に一握り

スライド 24　「改めて確認すること」

ということでいきますと、結論は書いておきましたけども、世界遺産になったんですから、羽曳野市にはそれを地域づくり、さらには人づくりに活かしていく工夫をしていっていただきたいと思うんです（スライド 25）。

ただし、すでに、先ほども紹介しましたけども、いろんな形で市民の皆さんによる自主的な活動は始まっているわけです。それらをさらに推進するうえでも、トータル的な理念と、格好いい言葉でキャッチコピーみたいなものを作っていただくといいんじゃないかな、と思います。これもデザインに含まれます。

ただし、そういうデザインもですね、行政だけが勝手にやってはいません。行政だけではできませんからね。行政は人を減らされて、予算も減らされて大変です。そういう事情があるので、やっぱり地域の方々と一緒にやることが重要なのです。行政は市民の意見をよく聞くことが求められます。

キーワードは子ども

デザインをする際のキーワードとして考えていただきたいのが「子ども」です（スライド 26）。

私は、前職の文化庁の時に、多くの遺跡が史跡になるお手伝いをさせていただきました。そして、今日のような企画、すなわち史跡指定記念シンポジウムなどの実施に際しては、子どもが主役となるような企画も盛り込んでください、っていうことを言っていたんです。

具体的なことは知らないですけれども、「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録に関係したシンポジウムが、おそらく堺市とか羽曳野市とか藤井寺市が、あるいは大阪府が主催であったのかもしれませんけども、子どもが主体となる企画がどの程度実施されたのかは気になるところです。

キーワードは子ども

地域づくり・人づくりに活かす工夫

無計画、なし崩し的な取り組みは台無し

トータルの「デザイン」が必要

行政は市民の意見をよく聞くことが重要

スライド 25　「キーワードは子ども」

史跡の保存・活用

子どもの参画が重要

史跡指定記念シンポジウム

子どもが主役となる企画

世界遺産でも同じ

スライド 26　「史跡の保存・活用」

この写真は、先ほどの白石先生の話で、日本列島で古墳の作られた範囲の話がありましたけれども、その南端にある、鹿児島県の唐仁古墳群が、追加指定された時の追加指定記念シンポジウムの時のものです。「唐仁古墳群には、全部でどれだけの数の古墳があったでしょうか」っていうことを中学生が聞いた時の答えに対して、一般の人もですが、小学生が、「はい！はい！」と答えているところです。会場は大いに盛り上がりました（スライド27）。

スライド27「追加指定記念シンポジウム　子ども」

スライド28「史跡指定記念シンポジウム　子ども」

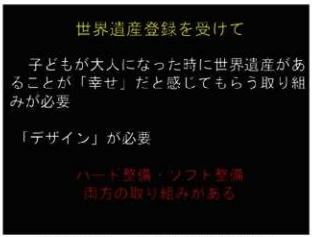
これは種子島なんですけれども、広田遺跡っていう砂丘上に作られた古墳時代の集団墓地の史跡がありまして、その史跡指定記念シンポジウムの写真です。中学生が遺跡について勉強した成果を発表したりとか、砂丘に作られたお墓だったので、そこから出土した副葬品をもとに女子高生は広田人をイメージしたファッションショーをしたりしました（スライド28）。

これは大阪から近くですけども、徳島県鳴門板野古墳群です。古墳のうちの一つが高速道路の上に前方後円墳の大代古墳が保存されたんですけども、その古墳の特徴を墳丘上で小学生が説明しているところです（スライド29）。

また、これは史跡ではないのですが、山梨県の南アルプス市では市内の遺跡案内板の原案を小学生が作ることにしています。新たに作成するため、すでに完成しているものを現地で調査しているところです（スライド30）。

スライド29「史跡鳴門板野古墳群の案内　子ども」

スライド 30　「市内遺跡の案内板の作成は子どもがおこなう」



スライド 31　「世界遺産登録を受けて」

このように、いろんなところで子どもが参画している事例があるのです。羽曳野市でも、子どもが主役となる取り組みをやっていただきたいところです。

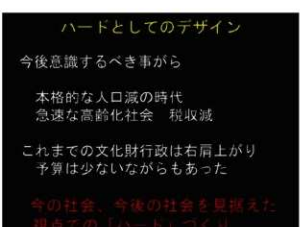
世界遺産の話に戻ります。世界遺産になりましたので、皆さんが、世界遺産になったことを喜ぶことは重要です。喜んでいただくとともに、その喜びを子どもたちに分け与える、「伝える」ってことが必要だと思うんです。

繰り返しますが、今の子どもが大人になった時に、自分のふるさと羽曳野に世界遺産があるっていうことを幸せだ、と思ってもらえる取り組みが必要です。子どもだけでなく市民の皆さんもそうです。そこには「デザイン」が求められ、そこにはソフトの側面とハードの側面の両方があるのです（スライド 31）。

ハードとしてのデザイン

それでは、ハードの方から話をしたいと思います（スライド 32）。これまでは、史跡指定されると整備をするということになっていました。竪穴建物を復元するとか、古墳を当時の姿に戻すなどハードの観点で整備が進められてきているところが多いわけです。

しかし、我々の次の世代に文化遺産を伝えていくときに考えるべきことがあると思うんです。それは、日本が本格的な人口減の社会になっているという現実です。急速な高齢化社会になっているということです。

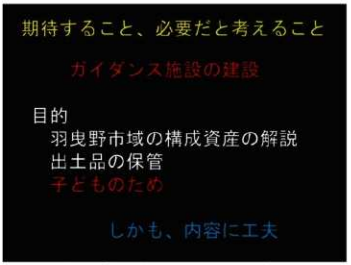


スライド 32　「ハードとしてのデザイン」

そうなると税金による収入は減少するわけですね。今までも文化財関係予算は少なかったんです。文化庁の予算は。でも、いろいろ駆使して予算を確保

し、多くの自治体の方々に整備や活用の事業に取り組んでいただいているわけです。

今までの文化財行政は、税収全体が増えていましたから、文化財関係予算も少ないながら右肩上がり、あるいは現状維持ができていたわけです。これが将来は右肩下がりになるわけです。今までと同じ考え方でいいのでしょうか。



スライド 33　「期待すること、必要だと考えること」

今後の社会のあり方を見据えた視点でのハード整備、これが重要だと思います。

タイトルで「期待すること」っていう課題をいただきました。期待すること、必要だと考えることをお話しすると、羽曳野市の場合は史跡であり世界遺産である古市古墳群のガイダンス施設は要ると思います。これは、強調しておきたいと思います（スライド 33）。

今、羽曳野市のガイダンス施設ってどこにあるかご存知ですよね。ここにおられる方なら。後ろに市の担当の方がいらっしゃり、ちょっとため息をつかれたようにも見えました。こんなこと聞いてすみません。

市役所の横にありますよね。でもプレハブです。あれでいいのか、というとよくはないわけです。このことは、ちゃんと考えていただきたいと思うんです。羽曳野市として。すみませんが。

羽曳野市の場合、史跡・世界遺産についてのガイダンス施設が必要です。今は、見学者がいつでも入ることはできません。見学者が気軽に入れる状態にする必要があります。本当は、それとともに、これまで数多くの調査をして多くの埴輪などが出てきていますので、その出土品の保管場所も必要です。これは、ガイダンス施設というよりも収蔵施設です。史跡・世界遺産をもつような自治体としては、そうした保管管理から公開活用ができる施設が、本来であればなくてはなりません。

そうすると、さっきの方向性からすると、矛盾するように聞こえるかも知れません。必要なものは必要です。でも、これまでもできなかったわけですから、理念も新たなものが必要です。そこで「子どものため」ということを考えてはどうでしょう。しかも、そこにアイデアを工夫することを提案したいと思うんです。

時間がなくなってきましたが、ここで、イギリスの話に戻り、ハドリアヌスウォールの話をしたいと思います。大ブリテン島の北方に位置しています（スライド 34）。ローマ帝国 14 代皇帝のハドリアヌスが、北から異民族が攻めてこないようにということで東西に大きな壁を作りました。要するにここがローマの

スライド 34　「ハドリアヌスウォール」

スライド 35　「ハドリアヌスウォール」

スライド 36　「ハドリアヌスウォール（ヴィンドランダ）」

国境線なわけです（スライド 35）。

この世界遺産をなぜ紹介するかと言うと、ここは「百舌鳥・古市古墳群」に近い関係にあるからです。一つは、世界遺産が複数の自治体に跨っているという点で。もう一つは、保存管理に市民の方々が関わっているのです。そういう事例があるので、今後の参考にしていただきたいと思い、紹介させていただきました（スライド 36）。

このハドリアヌスウォールですが、「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録にもご尽力いただいた、大阪大学の福永伸哉先生と一緒に行くことがありました。構成資産となっている考古遺跡を見る展望台があります。今だったら景観を害するということで、こういう施設を作るのは無理だと思いますが、ここから見下ろすことができて、遺跡の姿がよくわかりました（スライド 37）。

1 階の部分で解説がされていました。現地を見るだけでは、遺産の内容はなかなかわかりませんから、系統立てて構成資産を説明する空間は必要です。ちなみに、日本語解説もありました。それから、別のところにも建物が復元され、そこでローマ兵士の軍服の着衣体験もできました（スライド 38）。

こういった体験も、ガイダンス施設があればできるのです。いろいろ話をしましたが、やはり、必要最小限のガイダンス施設は必要だと言うことを重ねて申しておきたいと思います。

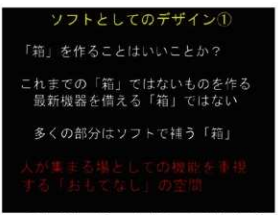
スライド 37　「ハドリアヌスウォール（セゲドゥナム・ローマン・フォート、バース＆博物館）」

スライド 38　「ハドリアヌスウォール（ガイダンス施設）」

ソフトとしてのデザイン

次に、ソフトの話をしたいと思います。立派なガイダンス施設、「箱」を作ればいいかってことになると、維持管理の問題が出てきます。

博物館でも最新の機器を駆使した施設ですという話はよくありますよね。それはそれで「あり」だと思うんですよ。でもそれは、できてしまったら「最新のもの」ではなくなってしまうという宿命にあります。



スライド 39　「ソフトとしてのデザイン①」

考え方を変え、最新機器を備えるような、これまでの「箱」という考え方ではない「箱」を作るということがあってもいいと思います。「箱」は作りますが、多くの部分はソフトで補うような「箱」を作るという考え方はどうでしょう。人が集まる場としての機能を重視する、「おもてなしの空間」としての「箱」を作るという考え方です（スライド 39）。

もし、そういうものができたとしたら、あまり例はないのではないかと思います。そのような「箱」に皆さんが集まり、いろんな企画を立案し実現していく。来訪者に「ソフト」で対応するところを大きくすると、皆さんにとっては活動する場面が多くなります。来訪者は、最新の情報の提供を受けることになります。行政は、これまでのようなハードに多くの経費をかけなくてもいいことになります。三者ともにメリットがあるのではないでしょうか。

これは紀伊風土記の丘で撮った写真です。墳輪製作体験をしたうえで、その墳輪が整備に使われているのです。こういうような企画をしようと思ったら、「場」がいります。皆さんが結集する「場」です（スライド 40）。

「箱」っていうハードができた後は、人が「箱」を育てる、そういったガイダンス施設です。そういう「箱」に、子どもたちが訪れるようにするのです。

調査研究も、大学の先生方や行政ではなくて、市民の方々も研究をするってことも重要です。「箱」で研究し、その成果を発表することがあってもいいでし

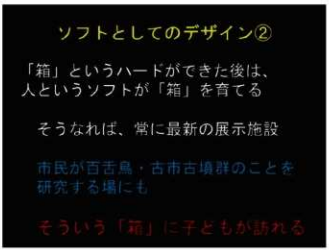
ょう。いろんな力が結集する「箱」、これを作ってはどうでしょう（スライド 41）。

話を進めます。やっぱり、前方後円墳は上から眺めたいということはあるだろうと思います。そりゃそうでしょう。でも、当時の人々は、あの鍵穴の形をした前方後円墳を見たことはないわけですよ。それなのに、あのような美しい形の墳丘を作ったのです。当時の人々の姿を想像してもらったらいいと思うんです（スライド 42）。ということは、さっき写真をお示しした場所を含め、ビューポイントマップを作るということもできるんじゃないのかなと思います。

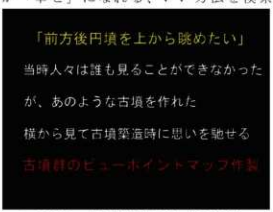
「世界遺産の百舌鳥古墳群「へリ遊覧飛行」に暗雲!? 住宅密集地…“騒音”に苦情殺到」っていう記事がありました。その記事へのネットでの反響は、「そもそも空から見るために作られたものではないのに、わざわざ上から見ようとするから…」、「ぜひ上から見てみたいと思っていたが、そんな騒音がするのか、やめておこう」、「資料で見ればよい。他に観覧方法を考えたいね」などの意見が多数出ています（スライド 43）。

そうした取り組みができるのならいいですが、当時の人々の視点に立つことが重要だと思います。活用方法には、試行錯誤があっていいと思います。みんなが「幸せ」になれる、いい方法を模索していただきたいところです。

スライド 40 「特別史跡岩橋千塚古墳群の整備」



スライド 41 「ソフトとしてのデザイン②」



スライド 42 「前方後円墳を上から眺めたい」

スライド 43 「世界遺産の百舌鳥古墳群「へリ遊覧飛行」に暗雲！？住宅密集地…“騒音”に苦情殺到」

5．まとめ

では話の方のまとめに入ります。これから期待することについてです。世界遺産登録によって、皆さんはスタートラインに立って走り出したところですよ、ということは確認しました。

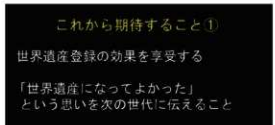
皆さんが、世界遺産登録の効果を享受することは、当たり前のことです。ただそれだけでなく、重要なことは「世界遺産になってよかった」という思いを、次の世代に伝えることです。そして、行政として羽曳野市は世界遺産を持つ自治体の責任としてやるべきことをやっていただきたいと思います。人口減時代において、持続可能な方法を模索しながらです（スライド 44）。

それから、「百舌鳥・古市古墳群」のことは羽曳野市だけの問題ではありません。藤井寺市、堺市、これを統括する大阪府、この 4 者が連携を図らなければなりません。

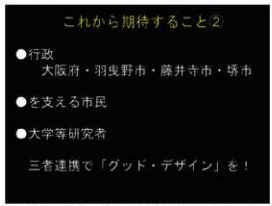
しかも、市民の皆さんや、行政に加えて大学等の研究者の力も要ります。この 3 者が緊密に連携して「グッド・デザイン」を考えていっていただきたいと思います（スライド 45）。

これから始まる皆さんの取り組みっていうのが、「百舌鳥・古市古墳群」を誇りに思い、羽曳野市を愛する人、もちろん藤井寺市、堺市、そして大阪府、さらには日本国を、愛する人を育てていくことになるのです。でも、それはあまり肩肘張らずに、それぞれの立場で、一人一人ができることから始めていっていただきたいと思います（スライド 46）。

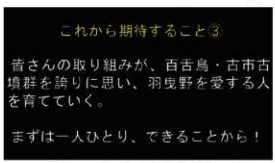
どうもご清聴ありがとうございました。



スライド 44　「これから期待すること①」



スライド 45　「これから期待すること②」



スライド 46　「これから期待すること③」

大阪府立弥生文化博物館

＜付記＞シンポジウムの記録集を作ることになったので、本文は当日の報告の趣旨を変えない形で一部加筆し、写真についても、一部追加して掲載した。

【講演 3】みんなで古墳再生大作戦
ー大垣市昼飯大塚古墳の整備と文化を活かしたまちづくりー

中井 正幸

皆さん、こんにちは。といいますか、はじめまして。今ご紹介をいただきました、岐阜県の大垣市から参りました中井です。

私の話が終わりましたら休憩になりますので、もうしばらく、ちょっと辛抱しておつき合いをいただきたいと思います。

まずもって、「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録、おめでとうございます。

私も実は、登録が決まった 1 週間後に、この堺と羽曳野市に足を踏み入れまして、町がどんな雰囲気になっているんだろうか、人々の意識が何か変わったかなということを肌で感じたくて友人とお邪魔いたしました。

といいますのも、実は、大垣市も、同じユネスコですが、無形文化遺産の「大垣祭の𠮷（やま）行事」という、「山・鉾・屋台行事」の一つとして登録を受けた経緯がありまして、その後、登録の前後で、市民はじめ、担い手の方々の意識が徐々に変わってきたことを肌身に感じておりました。そういったこともありまして、ぜひこのご当地を訪れたかったということになります。

さてこの羽曳野市での登録のシンポジウムの、記念すべきこのイベントで、なぜ、岐阜県の大垣の古墳、それも、150 メートルという、あえてそれほど大きくもない、全国的に知名度もそれほどない古墳の話を、この場でするのか。それは事務局の方のいろんな思惑があるのだろうと思いますが、私の方は、これまで昼飯大塚古墳という古墳を、20 年間、携わらせていただく、そんな経緯がございました。発掘調査から、そして史跡の指定、公有化、用地買収の仕事、それから史跡整備、そのあとの、いろんな活用ですね、そういったことを経験させていただきましたので、おそらくそういったことの中で、今後皆さんの、何かアイデアなり、きっかけになればということで、お呼びいただいたんだろうと思います。

図 1　岐阜県大垣市の位置

そんなことで今日は、あまり馴染みがないかもしれませんが、一つの古墳の、一つの再生というテーマで、お聞きいただければと思います。

資料の方はまたお帰りになって読んでいただければと思います。正面の画像でずっとお話を進めて参りたいと思っています。

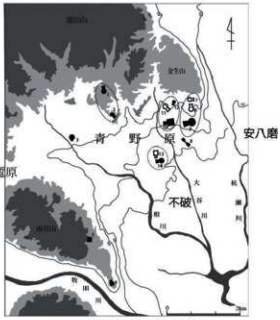
ざっと、まず、簡単な古墳の概要から、そして、

写真１　昼飯大塚古墳（整備後、遠方に伊吹山を望む）

都市計画と整備。それから、調査研究と整備。圧倒的にちょっとこの整備と活用のところをお話をして、最後に、史跡の役割みたいなことで考えていることをお伝えしようと思っています。

大垣市って皆さん、わかりますでしょうか。この地図にありますように、皆さんの大阪から東京へ行く時に、滋賀県を通って雪の多い関ヶ原を越えて、ちょっとようやく平野が開けたなといったところに、実は大垣市があり、この写真のような、前方後円墳、昼飯（昼飯町（ひるいちょう）にありますので、「ひるめし」と決して読まずに、「ひるい」と読んで欲しいと思います）大塚古墳がございます。

このちょっと遠景に写っている雪景色のこの山が、ヤマトタケルの伝承を持つ伊吹山になります。そんなところに築かれまして、この写真はちょうど整備がほぼ完了した平成 25 年の航空写真になります。



▲不破古墳群の前期首長墓分布図

墨井北グループ	昼飯グループ	青墓グループ
1. 親ヶ谷古墳	6. 花岡山古墳	10. 粉糠山古墳
2. 清塚４号墳	7. 花岡山頂上古墳	11. 遊塚古墳
墨井南グループ	8. 東町田遺跡	12. 八幡山古墳
3. 忍勝寺山古墳	9. 昼飯大塚古墳	矢道グループ
4. 象鼻山１号墳		13. 矢道高塚古墳
5. 南山５号墳		14. 矢道長塚古墳

図２　周辺の古墳分布

前方後円墳の形をほぼわかるようにしまして、ある一部を、当時の姿に復元をし、葺石を葺いて埴輪を並べて、そして、復元ゾーンとしての位置付けをして完成した古墳になります。ざっと古墳の概要をお話ししたいと思います。

これは学校向けのパンフレットの一部です。まだ整備をする直前に多くの方に成果を知ってもらうために、イラストで紹介したものです。左半分がまだ草むらになっています。右半分が調査でわかった内容です。後円部前方部ともに3段築成、そして葺石が葺かれ、埴輪が置かれています。そして墳頂部には、このように、同じ大きな墓壙の中に、竪穴式石槨と、その横に粘土槨と呼ばれる、棺を粘土でくるんだ構造のものが、ほぼ同時に並行してあることがわかりました。

さらにこの二つの棺が粘土で覆われた後に、さらにもう1体、箱状の木棺に葬られた人物がいる、こういう、3人が同じ墓壙の中に埋葬された、ちょっと稀有な例ということが、調査の結果わかりました。というふうに言って、聞き流された方もいらっしゃるし、「なぜ3人同時に埋まってるんだろう」と、「同時に死んだはずがないだろうし、あるいは時間差があるんだろうか」と、いろんな疑問を持たれた方もいらっしゃると思います。まだまだ、今後調査が必要な課題も多くあります。

古墳の規模ですが、墳丘の長さが150メートル。決して、この羽曳野の古墳と比べると、大きいとは言えませんが、岐阜県では一番大きい。そして作られた年代が、4世紀の終わり頃、今から1600年前頃ということになると、東海地方でも最大級という位置付けが、国の史跡の一つの要素になっています。

そういった国の史跡指定を受けた後、いよいよ、公有化を進めながら整備をするということになりましたが、このとき直面した課題として、古墳のどの範囲までを保護し、将来的に

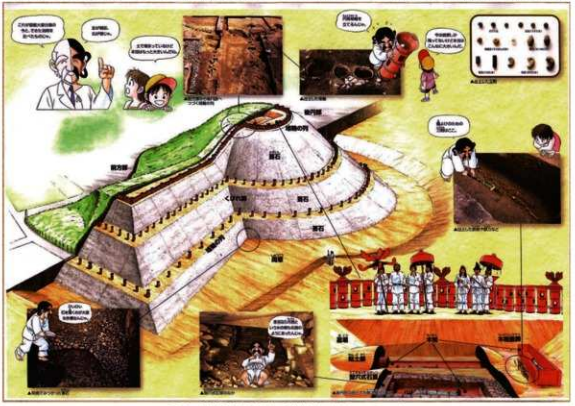


図3　昼飯大塚古墳　学校向けパンフレット

図 4　昼飯大塚古墳 整備事業着手頃の全景、古墳復元と事業予定地

それを拡張して整備していくのかという問題がありました。なぜかと言いますと、これは今から 40 年ぐらい前の写真ですが、墳丘は、もう竹やぶに覆われています。もう中に入ると、薄暗いそんな鬱蒼とした、人が入れないぐらいの、竹やぶでした。さらにそのきわを、旧中山道という街道があるため、古墳の周りに、家が立ち並びました。ですから、周囲の宅地などは実は古墳を削って建てたり、あるいは古墳の土を原料にして、土瓶を焼いたり瓦を焼いたり、そういう生業を営んできたという、そういう過去からのいきさつがありました。

そして一方で、発掘調査で、墳丘よりもさらに大きい範囲に、深い濠をめぐらせて、墳丘をかたちづくっていることがわかっていますので、本来この古墳を将来にわたって保護していくべき範囲になりますと、当然考古学的には、本来の形やその範囲を保護し、現状から修復していくということが望ましいと、我々文化財を扱う者は考えるわけです。しかし、地域の方々にとってみると、「長年、ここで暮らして、そして、一つのコミュニティを形成している私たちがなぜ文化財のために、わざわざ立ち退かなきゃいけないんですか。それだけ大事なんですか。」という疑問の声も聞こえてきたわけです。

結果、当面は、国の史跡の範囲に限定して整備することとなり、本来の古墳の範囲については、これからも継続して、時間をかけて話し合っていくことになりました。古墳は逃げるわけではないし、史跡指定になりましたので、保護されているわけですから、周辺のところについてはもう少し時間をかけて、じっくり住民の方と、対話をしながら、これからの古墳のあり方、そして地域のあり方、まちづくりを考えようねということで、一旦この範囲、整備をすることになりました。

このとき私が経験したことは、やはり文化財の保存というのは、これは、保存ですから、

現状を、壊すことなく将来にきちっと託すということが、本来の意味ですが、その土地に住む方々にとってみれば、古墳の価値を十分理解した上で、その古墳とともに生きていく、暮らしていく、そういう、「保全」っていう考え方ですが、都市計画の中での「都市保全」、そういった考え方が、史跡整備にも必要なのではないか、ということを改めて、史跡指定そして整備を考えるときに、考えさせられました。

そして、具体的にどのように整備をしていこうかという話になりました。整備に入る前の古墳の景観は、鬱蒼と茂った竹やぶで、周りに家が建ち並んでいる状態でしたが、発掘調査のたびに竹を切り、抜根し、自然に枯れるのを待ちながら、まずは竹やぶを取り除きました。そしてそれまで、墳丘を削って家が建っていたところが、話し合いに応じて徐々にその部分が空き地になりました。古墳が大きく削られていることが、本当にわかりました。特に後円部の辺りは、大きくえぐられていたのです。これはやはり墳丘をもとに修復すべきだろうという結論に至りました。

ところで、史跡整備について、各地の古墳や遺跡を見て参りますと、いろんな手法で整備をされていることがわかりました。それぞれの整備には、いろいろな経緯や話し合いで決められていると思いますが、昼飯大塚古墳では現状をなるべく変えないで、修復して後世に伝えよう、傷んだところだけ直そう、そういうことに決めました。さらに大きくえぐれたところは、発掘調査の成果をもとに、「復元ゾーン」としてかつての姿に復元をして、そこで葺石や埴輪を見てもらおうという、そういう「修復と復元」という方針を打ち立てました。そうしますと、墳丘の修復ということが大きな整備の主眼にもなりますので、古墳の修復をどのようにしようかということが、次に問題として上がりました。

その時、長く私の頭の中に、疑問といいましょうか、声が残っていました。ある遠足に来た子どもが、私に質問したんですね。「先生、なんで、古墳って崩れないの？」と聞きました。皆さんはどうお子さんに、お孫さんにお答えになるでしょうか。私はとっさに、「葺石というものが、古墳の土を押さえて、流れないようにしてるんだよ」と答えようとしましたが、全国には葺石がない古墳もありますし、古墳が崩れてしまっているところも多くありますので、子どもに対して明確な答えができなかった記憶がありました。

そこで古墳の墳丘を修復する際には、「なぜ古墳は崩れないのか」ということを科学的に解明した上で、修復する必要があると思いました。文化財の修復は、建造物の場合もそうですけれども、失われたところは、原則同じ材質で、修復補填します。その修復に用いられる技術も、伝統的な工法で、修復や復元、そして再現していくというのが原則ですので、古墳もそうすべきではないかと思いました。そこで修復する古墳の墳丘の土も、その場所にある、近い土壌で、本来築造に用いられた土木技術で修復してあげるべきだろうというふうに考えまして、京都大学の防災研究所の三村衛先生と連携して、地盤工学的な調査を行いました。

幸いといいますか不幸にもといいましょうか、昼飯大塚古墳の場合には、周囲を宅地や工場でえぐられた墳丘崖面がありました。直径が99メートルほどある、後円部のかなりの距離が、墳丘の下から上まで、土の盛り上げが観察することができたという、稀有な例でした。

考古学的には一般的に、こういう土の変化を、分層という作業で行います。下の方には少し黒っぽい土があり、途中に高まりが見られます。それを埋めるかのように、別の土がありますので、どうも、土壇状のものをまず作って、そこを埋めるような形で水平にして、さら

にまた土壇を作って、その詰めを埋めて、さらに盛り上げていくというそういう水平的な盛土の繰り返しが、考古学的な観察でわかりました。

でもこれでは、なぜ崩れないかという答えには到達しません。三村先生は、締め固めと水の含み具合がポイントだとおっしゃいました。ですので、次は墳丘崖面に注射器のような針のついたものを突き刺して、土の締め固め具合を調べることとしました。そして、水の含み具合も調べた結果が、図の右側になります。左側が同じ場所を考古学的に分層した土層図です。

写真２　墳丘崖面の針貫入試験

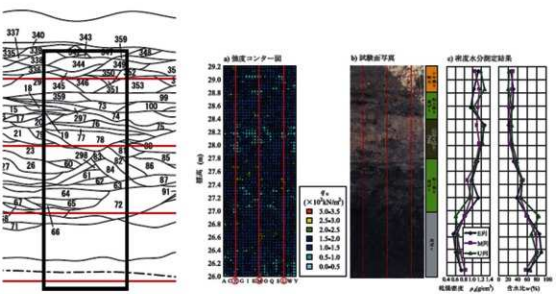


図５　墳丘土層図（No.9 付近）と後円部試験エリアNo.9 の結果

目を凝らして図を見ていただくと、水平な単位が少しずつ見えるかと思います。さらに土の締め固め具合も色で表しています。薄い水色が弱く、黄色が硬く締まっているところです。水平な単位を左側の数字で読み込むと、ほぼ 30 センチから 40 センチの厚みで、水平に盛土されたところで締め固められていることがわかりました。今でも土木業者の方は、30 センチぐらいの巻き出しで締め固めているのだと聞くと、古墳時代も現代も土木工事の基本はあまり変わりがないのではないかと思ったほどでした。このことで学んだもう一つのことは、私たち考古学を専門とする者が行う分層とは、墳丘の盛土の強度とはあまり関係がないと言いましょうか、それだけではわからないということでした。例えば、盛土の最下層の、この黒っぽい土、私たちの肉眼では、せいぜいここに１本、２本、何となく土が違うなと線を引く程度ですが、締め固めの単位は三つありますので、肉眼の観察と、地盤工学的な締め

固めが違うんだということがわかります。

さらに、もう一つの重要な要素である水の含み具合です。図の右側のグラフがその結果を示しています。一番下の黒ぼく土ほど、水を非常に高い割合で含んでいます。一番低いところほど、実は水を含んでいたのです。一般的に、雨が降って古墳の上に流れたり染み込んだりする深さは、1メートルから2メートルと聞きました。8メートル以上、10メートル近い深いところに水は浸透しません。この結果は、当時この黒ぼくの土を使うときに、締め固めに適した水管理をして、そして締め固めたということを表しています。

ここでようやく、子どもの質問に答えられるようになりました。古墳がなぜ崩れないのか。それは、その土地の土壌にあった締め固め具合と、水の管理が適切に行われているから、壊れないことがはっきりわかりました。そして整備工事では、墳丘の修復をこの方法で進めていったのです。

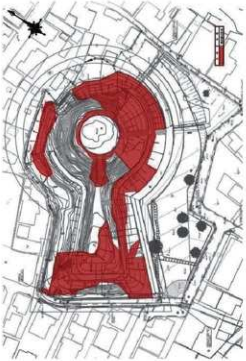


図6　墳丘修復範囲

そして次に、整備で埴輪を並べることです。昼飯大塚古墳では発掘調査の結果、円筒埴輪がたくさん出土していますが、それらの考古学的な考察の結果、いろいろな結果がわかりました。今日ここでお伝えするのは、それらが全体の形や外面調整、そして製作技術などから三つのグループに分類できたということです。そのため整備で復元する円筒埴輪は、こうした研究成果を反映し、なるべく忠実に復元をして、その場所に復してあげようという方針で整備を行いました。復元埴輪は、愛知県の瀬戸の陶芸職人さんが手掛けることになったので、そこへお願いして、実測図を見ながら三つのタイプの円筒埴輪を作っていただきました。

一般的には、我々の考古学的ないろんな研究者の中には、分類したものが、一つ一つのグループ、これは、工房といいましょうか、集団といいましょうか、そういう推測をすることがあります。ところが、この職人さんは1人で、実測図を見ながら、三つのタイプの埴輪を、時間を分けながら作り分けていたのです。これには私たちも驚きました。

粘土を積み上げようとする場合、時間をおきませんと、粘土の重みで崩れますので、乾燥させながら、異なるタイプの埴輪を一人で作り上げることができたので

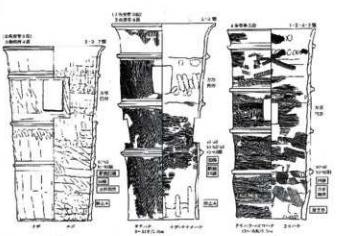


図7　円筒埴輪の分類（Ⅰ～Ⅲ群）

す。このようなことが実際にできるということは、私たちが行っている分類という解釈を今一度考え直す必要があるのではないか、また一つ課題ができたなと思っています。

乾燥後に、野焼きで仕上げた複数の復元埴輪は、先にお話しした後円部の「復元ゾーン」の２段目のテラスに並べましたが、それ以外の１段目のところには、市民参加による埴輪づくりを企画し、みんなで整備に参加できるような企画を立てました。

写真３　複製埴輪（焼成前）

昼飯大塚古墳の整備が一段落した後に、毎年自分の作った埴輪を並べてもらおうという取り組みです。これもいろんなところで行っています。多くのところは、一つの埴輪を、２人３人で共同して作る。あるいは１人で作っちゃうこともあるかもしれませんが、昼飯大塚古墳では、近くの中学校１年生 150 人全員が関わるという取り組みをしました。

写真４　複製埴輪の野焼き

しかし、どうしたらそれができるのか、当時の私にはさっぱりわかりませんでした。でも学校の先生はさすがですね。それをうまくカリキュラムに作りあげ、授業としました。最初の粘土の塊から、紐状にするクラスから、次のクラスは、輪積みを一つの段ができるまでの高さまで作る。これを三つ作って一つに合体するクラスというように、それぞれのクラスで円筒埴輪の製作を分担したのです。そして最後のクラスが、突帯をつけ、透かし孔をあけるなど、最終的な仕上げをして完成をさせたのです。そして焼き上げた後は、自分たちの手で古墳の現地で取りつけるという、最後まで生徒全員が取り組みました。現地にある 39 本の円筒埴輪は、こういった子どもたちや市民が製作したものを並べていますが、5 年間で 39 本、作りました。5 年間の中学１年生は全員関わっています。

写真５　学校での埴輪づくり

写真６　埴輪の設置作業

さらに、葺石も、児童生徒や市民参加で復元整備を行いました。史跡整備といいますと、どうも、市役所がやっている、業者がやっている、そういう印象が非常に強いのですが、どうも整備した公園とは距離が開いているように感じていました。そこで昼飯大塚古墳の整備では埴輪もそうだったんですが、葺石も自分たちが関わった、そういう親近感を持ってもらおうとした取り組みです。これは小学校 6 年生と市民に参加してもらいました。

写真 7　「復元ゾーン」での葺石葺き

では実際にどのように整備したのかと言いますと、大人の人が手を広げたぐらいの単位ですね、一尋（ひとひろ）と呼んでいますが、その範囲の中に 1 人 2 個ずつ、職人さんの指導により葺石を葺いていきました。葺き方も当初は、盛土をしたところに、軟らかい粘土を 1 枚被せて、そこに突き刺すようなことをしました。しかしそれは非常にもろいことがわかり、その後は盛土を削って石を順番に積み重ねた後に、盛土を隙間に埋めていくという、そういう作業をしました。子どもたちは 5 年間、順番に葺石を葺きましたので、自分が葺いた石をきっと覚えてくれていると思います。

こういった、小学生、中学生に整備に関わってもらおうという、そのきっかけはシンポジウムでした。完成間際に「昼飯大塚古墳シンポジウム」というのを、1 月の半ばに行いました。まさしく今回のこうした市民を対象にしたシンポジウムでした。第一部は、有識者による古墳の価値づけを皆さんにお伝えをしました。そして第二部として、小学生と中学生にシンポジウムに出てもらったんです。

写真 8　「古墳シンポジウム」での学校提案

その参加の仕方ですが、それにはあるきっかけがありました。実は近くの中学校の先生のなかで、とても古墳に関心を持たれた先生がいたんです。ほぼ毎日、古墳の整備に顔を出されて、「中井さん、何かお手伝いすることありませんか。何か私たちにできることはありませんか。」というふうに、いろいろ話しかけてきたのです。「それじゃ先生、シンポジウムをやるので、それにちょっと出てく

ださいよ。」という話をもちかけたところ、「子どもたちと寸劇をします。」ということになったわけです。

当日シンポジウムでは、ステージのところに教室の場面を作って、先生が「みんな、昼飯大塚古墳の公園ができたら、ここで何をしたい？」という問いかけをしたのです。すると、ある生徒は、「健康ウォーキング」をしたいと発言しました。周りにいろんな遺跡があるので、そういうところをめぐりながら、古墳をウォーキングのゴールにしたいと。そしてある生徒は吹奏楽部に入っていたので、この公園で「吹奏楽」をやりたいと発言しました。さらに別の生徒は、この公園で「古墳バーガー」を食べたいって言って、お母さんと一緒に古墳バーガーの試作品を作って、見せてくれました。

写真 9　古墳での地元中学校による野外演奏

そういう子どもたちの提案といいましょうか、夢を、最前列にいた市長が聞いていて、シンポジウムが終わった途端、「この子どもたちの夢をかなえてあげよう」ということとなり、市長の一声で、夢を実現する予算がつきました。

そして、古墳公園が完成した秋に、こういったウォーキングでのイベントとして、コンサート、そして業者に 50 食あまりの古墳バーガーを作ってもらいました。今は、このイベントをきっかけに、地元の和菓子屋さんが「古墳饅頭」を作って、今も販売をしてくれています。このようにイベントといいながらも、子どもたちが提案をする、その子どもの提案を、大人が一緒に考えながら実現していくという、そういう試みを古墳の整備をきっかけに行ったのです。

もう一つ子どもたちと古墳の関係を話題とすると、平成 25 年から始まった、大垣市独自の、「ふるさと大垣科」という土曜授業があります。子どもたちが、史跡を学習したり、史跡でいろんな体験をする授業には、総合学習があります。その総合学習と「ふるさと大垣科」が違うのは、基本的に土曜日に年間 30 時間やるんですけども、そのうち 15 時間をふるさとの勉強に使おうということで、私どもの職場の関係では、俳句を作ったり、古墳に来てもらうことを担当しています。

また総合学習と「ふるさと大垣科」の違いは、成績表に評価がつくかつかないかです。ですから、古墳を見学する児童生徒は一生懸命になるんです。さらにこの「ふるさと大垣科」では、学校の先生が頑張り始めたのも印象的でした。こういった子どもたちの見学に、今までは、教員ＯＢの市民講師が担当していたのですが、こんどは学校の先生自身が、自分たちで考えたカリキュラムで、古墳現地や出土品を、子どもたちに伝えるようになりました。

大垣市は人口 16 万人で、小学校は 22 校、約 1500 人の 6 年生がいます。毎年、その約 1500 人の児童がバスや徒歩で、昼飯大塚古墳を訪れています。こういう学校の取り組みは、先生

写真10　専用タブレット端末

写真11　ITガイダンスシステムを使う子どもたち

が熱心な学校では、整備の前から遠足を利用して来てくれていました。今は、古墳を見学するときには、タブレット端末を使いながら、かつての古墳の姿をイメージしたり、あるいは先生が作った「学習補助シート」で、話を聞いてまとめることをします。しかし、私は、史跡の見学で一番大切なことは、やっぱりこの場所で、古墳がどうして、なぜここに作られたのだろうかとか、誰が埋葬されているのだろうかとか、何のために埴輪を置くのだろうかとか、いろんなことを考えたり想像する場所だということです。それは教室で学べない、教科書では教えてくれない、本当に大切なことは現地で学ぶことなんだろうと思うところです。やはり、本物を見ることが、子どもたちにとって大きな記憶として、体験を通じて残るんだろうと思っています。

ここで一つ、変わった例をお話しします。愛知県稲沢市と大垣市では、以前から文化財愛護少年団というものを作って活動しています。指導者は民間の人ですが、文化財に関心を持つ子どもたちと、勉強会をしたり、見学会を毎年開催しています。あるときその二つの少年団が、相互に交流をしました。そうすると、交流会では子どもが、自分の住むまちの自慢をするんですね。こんな文化財がありますよ、こういう古墳がありますよ、こういうお寺がありますよ、というように。子どもが子どもに伝える。これは意外と子どもにとっては新鮮だったと思います。残念ながら、大垣の文化財少年団は、今は解散してしまっていますが、こういう取り組みも整備をきっかけにありました。

図8　漫画で伝える

それから、ずっと心がけたことは、古墳の価値や、様々な活動をわかりやすく伝えたいということでした。大垣の女子短期大学には漫画学科があるのですが、そこの渡辺浩行先生と一緒にタッグを組んで、現地説明会の資料を漫画で作ることも試みました。皆さんもいろんな発掘調査の現場説明会へ行きますと、文字や、図面や写真、今は

カラーもあるかもしれませんが、当時は漫画で資料を作っているところがありませんでした。漫画では今回の調査の目的や、調査でわかったこと、そして、課題として残ったことなどを、ストーリー仕立てで伝えたのです。また漫画に出てくる主人公を、当時発掘に参加してくれた学生として、より親近感を高めました。そうすると、文字は読めなくても漫画は読める人はたくさんいますので、子どもからお年寄りの方まで読んでいただくことができました。今でも、こうした漫画を使いながら、古墳の築造当時の原風景のイメージを伝えたり、あるいは墳輪を作ることの目的を、子どもたちの目線で伝えています。

そして古墳の活用から学んだことは、古墳の価値や意味を、市民が市民に伝えることの大切さでした。私は長年、「まちづくり工房大垣　歴史観光グループ」という、市民団体と関わりながら、活動してきました。その団体とは出前講座をきっかけに出会い、その後、古墳に関心を持っていただいてからは、「昼飯大塚古墳のPRを一緒に協力しましょう。」ということとなりまして、まず実際に古墳を知るために、発掘調査を体験してもらいました。市民の方々が、トレンチに分かれて分担して作業し、終わった後にはミーティングをするわけですけども、自分が担当したところの成果を、同じNPOの方に説明するのです。掘ることは簡単かもしれませんが、自分のやったことの意味を相手に説明して伝えるのは、意外と難しいと思います。それを繰り返しながら、昼飯大塚古墳の魅力を、様々な機会で伝えていただきました。

図9　「市民が市民に伝える」・「新しい企画と交流」

その一つに、市民団体のフェスティバルでは、そこに昼飯大塚古墳のブースを作っていただいて、昼飯大塚古墳のPRをしてもらいました。ここで「古墳ブローチ」を作る体験コーナーもありました。今日私も付けてきています。今日ここにその団体のお一人である、中島さんが、この会場まで来ていただいております。

そのようにして NPO の方と連携していく取り組みは、最近では愛知県の犬山に拠点を置く、赤塚次郎さんが主催する NPO と昼飯大塚古墳のペーパークラフトづくりなどで、連携を深めています。

少しずつまとめに入ろうと思います。20 年間の中で昼飯大塚古墳をきっかけに取り組みましたことは、こういうことだろうと思っています。調査や整備を通じて、私たちはいろんな発掘をしながら、成果を報告書や、講座や講演会で、皆さんにお伝えしてきました。そして一方で、公園部局や都市計画の方々と、公園の整備に関わりました。その中で大学と関わり、そして学校とも、協力関係で子どもたちにも、古墳に関わってもらいました。そして NPO の方とも一緒に活動しました。

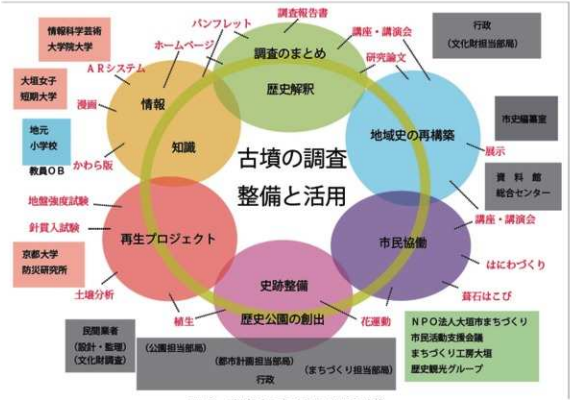


図 10　古墳がむすんだ異分野の連携

このように、それまで全く縁もなかった、知り合いでもなかった方々が、古墳を調査したり、整備することで、つながったんですね。このことは、文化芸術の仕事で知り得た「文化的コモンズ」という概念に近いことがわかりました。「文化的コモンズ」というのは、文化会館や市民会館など、今日の会場であるホールもそうですね。こういったところにはいろんな方々が出入りしますよね。そこで音楽や美術、日本舞踊などの、様々な方々が活動します。そしてその活動は、施設を使うことから、地域に根差したさらにいろんな団体とまたつながっていく、そういうあり方と、「古墳」の整備までのプロセスの活動を、「コモンズ」というふうな表現でとらえてはどうだろうかと考えています。

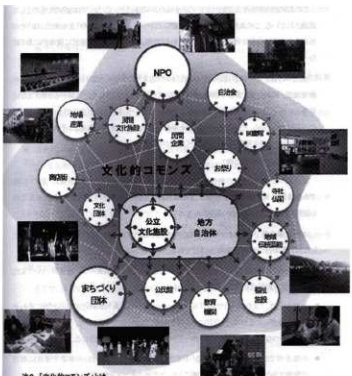


図 11　「文化的コモンズ」のイメージ

「コモンズ」は、「共通の」とか、「入会地」とか、そういう「公共的な」ものを指します。古墳をきっかけに、新しい仲間や、いろんな分野の人が集まってきたことで、一つのコミュニティ、コモンズができ上がっていくのです。昼飯大塚古墳の場合では、実際に、そういうことが起こりえたということですね。

これは、決して古墳の場合に限ったことではない、と私は考えています。江戸時代終わりから明治時代の初めに、西周（にしあまね）という哲学者がいます。その方の講義内容が、「百学連環」という、そういう書物でまとめられています。文字どおり、様々な分野のものをつなげていくんですね。細分化した様々な人や団体、それらをつなげていくことが求められているのではないでしょうか。昼飯大塚古墳の活動を通じて、それを強く感じるようになりました。

今日、リーフレットを入れてありますが、大垣にある多種多様な資料館や文化遺産を、つなげていこうとしているところです。それぞれ単独にあるものを、あるいは異質なものであっても、それらをつなげていく、そこから新たな人々がつながり、活動につながっていくことを期待しているところです。

最後になりますが、先ほど、中学生小学生、いろいろ取り組んでくれた子どもたちがいましたが、その中で、小学校の6年生の子が読んでくれた作文をちょっと紹介して終わろうと思っています。ちょっと読んでみますね。

「1600 年前という、はるか昔におおぜいの人の手によって作られた昼飯大塚古墳。そんな古墳が、今、私たちとつながっています。そんなところで、思い出いっぱいの時を過ごせて、この青墓で生きていられることが幸せです。また、この貴重な体験のひとつひとつが、偉大な昼飯大塚古墳が生み出されてきた『奇跡』なのだと思います。だから、古墳を作った人に、『奇跡を起こしてくれてありがとう』。」

というものです。

もう1人、ご紹介します。

「昼飯大塚古墳は日本の宝です。私たちのふるさとに、こんなすばらしいものがあることをうれしく思いました。私たちは、昼飯大塚古墳を未来に残していくことが大切だと思います。そのために、私たち小学生がふるさと学習で地域の史跡を学ぶことを伝統として続けていくこと。また、地域の人たちと協力して、保存し、未来に伝えていくことが大切だと思います。」

今年の夏、ある大学生が私のところへ訪れました。いろいろ話しているうちに、「私、小学校6年生のときに、バスに乗って昼飯大塚古墳に行きました。」と言ってくれました。「今何をしているの？」と聞いたら、ある大学の考古学研究室に入って、古墳に興味があると言ってくれました。ああそうか、最初に古墳を案内した小学生は今、大学2年生3年生だなというふうにつくづく思いました。

そういう子どもたちが1人でも増えていくこと、そういう教育的なことも、私たちが、この史跡や古墳を通じてできていることだとつくづく思いました。また、こういったことを強く感じることは、古墳が残っていくこと、未来残していくこと、それが大切だとつくづく思いました。ご清聴ありがとうございました。

参考・引用文献
西村幸夫 2004『都市保全計画』 東京大学出版会
中井正幸 2005「昼飯大塚古墳における史跡整備の取り組み」『遺跡学研究』第 2 号 日本遺跡学会
豊田富士人 2009「整備の基本設計」『史跡昼飯大塚古墳Ⅱ』 大垣市教育委員会
中井正幸 2009「昼飯大塚古墳に学ぶ～これからの考古学と現代社会を見つめて～」『立命館大学考古学論集Ⅵ』
三村衛 他 2010「史跡昼飯大塚古墳墳丘の盛土構造に関する検討」『第 55 回地盤工学シンポジウム平成 22 年度論文集』
関口敦仁 2013「IT 型ガイダンスシステムの整備」『史跡昼飯大塚古墳Ⅲ』 大垣市教育委員会
中井正幸 2014「昼飯大塚古墳の整備事業と街づくり」『古墳時代の考古学』10 雄山閣
中井正幸 2017「昼飯大塚古墳の整備とは何か」『三河の国、ここにはじまる！』 雄山閣
佐々木雅幸編 2019『創造社会の都市と農村－SDGs への文化政策－』水曜社
大垣市教育委員会 2003『昼飯大塚古墳Ⅰ』、同 2009『昼飯大塚古墳Ⅱ』、同 2013『昼飯大塚古墳Ⅲ』
第 26 回考古学研究会 東海例会編 2016『古墳の調査と整備－保存と活用を考える－』
一般財団法人地域創造編 2016『地域における文化・芸術活動を担う人材の育成等に関する調査研究報告書－文化的コモンズが、新時代の地域を創造する－』

羽曳野市立生活文化情報センター ＬＩＣはびきの
ホールＭ ホワイエでのパネル展示

パネルディスカッション

パネラー　白石 太一郎、禰冝田 佳男、中井 正幸、谷水 みさ子（四十四の会）
進　行　　伊藤 聖浩（羽曳野市教育委員会 文化財保護課）

（伊藤）

皆さん、こんにちは。私は、羽曳野市教育委員会文化財保護課で世界遺産の事務を兼務しています伊藤聖浩と申します。今日のパネルディスカッションの進行役を担当します。よろしくお願いします。

パネルディスカッション
「世界文化遺産のあるまちへ グローイングアップ」

今回のシンポジウムは、「世界文化遺産のあるまちへグローイングアップ」で、サブタイトルが、「「百舌鳥・古市古墳群」の過去・現在・未来」というテーマを設定しています。まさにタイトルの通り、今日の白石先生の講演の内容は、世界文化遺産に登録されました「百舌鳥・古市古墳群」の過去の話でした。そして、その話を受けて、現在の状況、そして未来へ、どのように継承していけばいいのか、これらのことについて、パネルディスカッションでは考えてみたいというふうに思っております。

このことを考えるにあたって、キーワードとしては、地元の人たち、あるいは市民の人たちとの協働ということも視野に入れて考えていきたいと思っております。そういうことで、今回のパネルディスカッションは、先ほど講演していただいた先生方に加えて、「百舌鳥・古市古墳群」の世界文化遺産の登録を目指して、羽曳野市を中心に市民団体を立ち上げて、今なお継続して活動をしていただいている団体、実はこれは幾つかあるんですけれども、これらの団体を代表して、「四十四（しとよ）の会」という会があって、そこの谷水さんに今日はご参加いただいて、パネルディスカッションをやっていきたいと思っております。谷水さんは、初めて登壇という形になりますので、「四十四の会」という会の名称、これは「四十四」と書くんですけれども、この名称の由来のことも含めて、自己紹介お願いしていいですか。

（谷水）

改めまして、四十四の会、谷水と申します。まず、「四十四の会」というのが、今もご紹介にありましたように、「四十四」と書きます。「四十四の会」。これは、わざとわかりにくい名前にしておりまして、「何で四十四なの？」っていうのを聞いていただくために、この会の名前にいたしました。発足当時ですね、今は 10 年目に入っておりますが、その時に、古市古墳群に古墳が 44 基ありました。なので、すべて、44 基を 1 個も漏らさずすべて世界遺産にしたいな、そういう思いを込めまして、四十四と書いて「四十四の会」っていうふうに、名付けました。

この会の特徴はですね、まず藤井寺市、それから羽曳野市、これらの市を越えまして、市民が一緒にやろうということです。その大切さっていうのは、古市古墳群というのができた時代には、羽曳野市も藤井寺市もなかったんですから。それを越えて、古市古墳群ということで一緒に思いをしよう、ということで集まりました。

（伊藤）

どうもありがとうございます。これで、今回登壇されている方は、全員発言したことになります。それでは、先ほどの3人の先生方の講演をもう一度振り返ってみたいと思います。

白石先生は、「「百舌鳥・古市古墳群」とは何か」というタイトルで、現在から見て過去、つまり、現代に生きる私たちが認識できる、1600年前の古墳時代の「百舌鳥・古市古墳群」の様子のお話をいただいたわけです。倭国と呼ばれた当時の、最大規模、あるいは第2位の規模の前方後円墳が築造され、これが中心となって形成された古墳群が、「百舌鳥・古市古墳群」であるということ。また、「百舌鳥・古市古墳群」をいわゆる「河内政権」が存在した物証として評価され、東アジアの情勢、特に朝鮮半島との動向に注目されて、この時期に台頭してきたのが、「百舌鳥・古市古墳群」の勢力である、というご説明だったと思います。そして、倭国への、朝鮮半島や中国大陸から来た、文物あるいは技術、あるいは思想の流入が、この「百舌鳥・古市古墳群」の時期に当たるんだという説明もあったと思います。この倭国の一つの文明化を象徴するモニュメントが、「百舌鳥・古市古墳群」であるというご説明があったと思います。最後に、応神天皇陵古墳、別名は誉田御廟山古墳という名称もあるのですが、また仁徳天皇陵古墳、これも別名が大仙陵古墳、あるいは大山古墳と言われていますけれども、それら古墳の被葬者についても少し言及されて、非常に興味深いお話だったと思います。そこで白石先生、先ほどのお話の中で、何か補足とか、もうちょっと深く触れておくっていうところはありますでしょうか。

（白石）

白石 太一郎 氏

そうですね、まだまだ取り上げたかったことは多いんですけれども。私に事務局から与えられましたテーマは、いったい「百舌鳥・古市古墳群」とは何なのかということなんです。それでとりあえず、1番から4番までのテーマを挙げ、こういうところが面白いんじゃないかということでお話をさせていただきました。

もう一つ、これ、4番に関係すると思うんですが、古市古墳群の中心となる誉田御廟山古墳ですね、これが、先ほど申しましたように、私は応神天皇陵だと考えておりますし、その蓋然性は極めて高いと思っているんですが、その根拠は、もう古く、大正の初めに喜田貞吉先生が提起されたように、すぐ南側に誉田八幡宮があるということです。先ほど申しましたように、誉田八幡さんというのは、応神天皇とそのお母さんの神功皇后をお祀りするところです。

これ、八幡さんによってちょっとずつ違っておりまして、応神天皇、仲津姫と、さらにお母さん、神功皇后というところもあってちょっと違うんですけど、応神天皇と神功皇后は必ず入っている。いずれにしても応神天皇をお祀りした神社であることは間違いないわけです。律令体制が崩れつつあるとはいえ、まだ律令時代といえる平安時代の中頃に、もうすでに誉田八幡宮がここにでき上がっていたことは最近の研究からも明らかだということになると、これが応神陵であることを疑うのは極めて難しいんではないか、というのが喜田先生のお説なんですが、それはまさにその通りだと思うんですね。

応神天皇を主祭神とする誉田八幡宮
（撮影 保田 紀元）

そういうことで、これは日本の古墳の中でも非常に珍しい、その被葬者をお祀りする神社が、すぐ前（一応、現在の認識で「前方後円墳」ということで、前方部を前と呼んでいますから、実際は後ろ側となるんですが、これは亡くなられた森浩一先生が問題提起しておられたように、わからないんですね。むしろ誉田御廟山古墳と誉田八幡宮との関係を考えると、逆である可能性、この場合南が正面で、後円部側が前だった可能性も強いことを、森浩一先生は指摘しておられましたし、まさにその通りですけれども）、いずれにしても、すぐ隣接してあるわけです。

こういう例で確実なものというのは、私の知る限り他にはないと思うんです。日本に数ある古墳の中で、その被葬者を祀る神社が、平安時代の中頃にはすでに存在しているっていうような例はほかにちょっと見当たらない。神社ではありませんが、これまた南河内では、太子町の磯長谷古墳群の中にある聖徳太子の墓、この聖徳太子のお墓のすぐ前には、聖徳太子のお墓をお守りするための墓前寺としての、叡福寺。これ、地元ですからよくご存知だと思いますが、叡福寺が存在しております。これは、文献からはそれほどさかのぼれないようですけれども、この叡福寺に用いられている瓦は平安中期から後期のものです。従って、この墓前寺である叡福寺も平安時代の中頃にはすでに存在していたことは間違いないんです。それからこれは私の考えですが、考古学的な検討の結果も、この叡福寺に存在する大型の円墳、現在聖徳太子墓として宮内庁は管理しておりますけれども、これが聖徳太子の本当の墓である蓋然性は極めて高い。この二つぐらいだと思うんです。

いずれにしても、そういうことから、古市古墳群については、世界遺産の登録した構成資産にはもちろんなっておりませんけれども、この古市古墳群の歴史的な位置付けなりを正しく理解していただくためには、隣接する誉田八幡宮、これと一体的に保存活用するということはどうしても欠かせないんじゃないか。

そういう観点からいうと、この古市古墳群については、誉田八幡宮だけではなくて、これは日本遺産にすでになっておりますけれども、大和の飛鳥から、この二上山の南側を通ってこの南河内に出て、この古市の地を通って大阪湾岸に至る、いわゆる竹内街道もあるわけです。しかも、この古市の中をこの竹内街道は東西に通っている古代の幹線道路ですけれども、

これと、南北に通っておる、いわゆる東高野街道。東高野街道というのは「高野」という名前からもわかるように高野山との関係でついた名前ですから、その名前からは相当古くさかのぼらないかもしれないけれど、いずれにしても河内平野を南北に縦貫する幹線道路であることは間違いない。これは、おそらく平安時代や奈良時代、あるいはそれ以前、古墳時代までさかのぼることは、私は間違いないと思うんですが、そういう、竹内街道や、後の東高野街道というような幹線道路が、まさにこの古墳群を通っているわけです。

横口式石槨をもつ鉢伏山西峰古墳

西琳寺跡出土の鴟尾

それからさらに、いわゆる「近つ飛鳥」といっていますけれども、この古市古墳群及び周辺地域は、これは今回、世界遺産に登録された古墳時代中期の5世紀を中心とする時代の大型前方後円墳だけじゃなくて、もう大きな前方後円墳が造られなくなって以降の（前方後円墳が造られなくなっても古墳そのものは、約1世紀間造られ続けるわけでこの時代を考古学では、「古墳時代終末期」と呼んでいますが）、だいたい7世紀ですね、終末期古墳については、それを考える上に欠くことのできない非常に重要な終末期古墳が分布する地域でもあるわけです。

それからさらに、ここは、その時代からさらに続く、まさに初期の仏教寺院、7世紀8世紀の、飛鳥・白鳳時代の古代の仏教寺院、寺院が残っている例はそうありませんけれども、寺跡が残っているわけです。そういう古代寺院が日本で最もたくさん分布しているのは、やはり大和の飛鳥を中心とする地域ですが、それに次いで多いのが、この古市を中心とする近つ飛鳥の地域なんですね。

そういう、非常に重要な古代の歴史遺産が濃密に分布する地域と重なっておるわけです。しかもそれは、時間がないので詳しいことはお話しできませんが、古市古墳群を理解するためにいずれも欠くことのできない重要な歴史資源、歴史資料であるわけです。そういう意味で、この古市古墳群の活用には、狭い意味の古墳だけではなくて、誉田八幡宮をはじめ、竹内街道、東高野街道、そういったもろもろの歴史遺産とあわせて、有効活用を考えていかなければならないのではないかということを申し上げたかったんです。それについては詳しく触れることはできませんでしたので、補足させていただきました。

（伊藤）

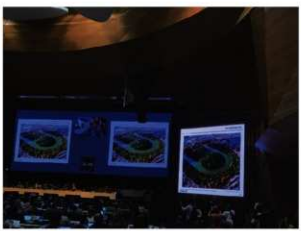
はい。先生、どうもありがとうございます。実は、この羽曳野市もそうなんですけれども、隣の藤井寺市、あるいは太子町、これらの地域は先生がおっしゃった、「近つ飛鳥」と呼ばれている範囲ですよね、この地域は古墳時代の次、飛鳥時代と呼ばれている、その時代にもたくさんの遺跡が残っているんですね。終末期古墳というものについても、古墳がもうほとんど全国的に造られなくなった 7 世紀においても、非常に特殊な横口式石槨と呼ばれている埋葬施設が造られているところなんです。そういった意味でも、律令国家に向かって日本が進んでいく、そういうことを考えるためにもこの地域というのは非常に重要な地域なのかな、と今もお話を聞いていて思いました。

今の先生のお話の中で、誉田八幡宮のお話が出ました。この誉田八幡宮は、現在も応神天皇陵と深いつながりを持っています。9 月 15 日に、おみこしが応神天皇陵にお渡りをするという、そういうお祭りをやっているんですね。今なお、応神天皇陵とその神社の関係が祭祀として残っているというこの点も、実は世界遺産の登録の際に、重要なポイントになったんです。

ここで、今回の世界文化遺産登録に関しまして、簡単に説明したいと思います。「百舌鳥・古市古墳群」が世界遺産登録されたのは、7 月 6 日の土曜日でした。「百舌鳥・古市古墳群」が審議されました第 43 回世界遺産委員会は、アゼルバイジャンの首都バクーにあります、コングレスセンターというところで開催されたわけです。審議の様子については、会場内のパネルで古墳の様子が映し出されて、イコモスからの報告がなされたわけですね。そのあと、審議がなされたわけですね。

第 43 回世界遺産委員会の会場 コングレスセンター（アゼルバイジャン　バクー）

現地の様子を、地元の方でも共有したい、見たいということで、羽曳野市ではパブリックビューイングを行いました。「百舌鳥・古市古墳群」について、おおよそこれぐらいのタイミングで審議されるんじゃないか、というのは事前にわかっていました。7 月 5 日の可能性もあったんですね。その 5 日は、日本時間でいうと、晩 8 時ですね、20 時から 23 時で行われるということだったんですね。古市駅前の広場で、野外でパブリックビューイングをやったんですね。結局この 7 月 5 日は決定しなかった。おそらく 200 名から 300 名の方が、晩 11 時まで残って見ていただいたんですね。たくさんの人が来ていただいたということです。しかし、残念ながら、この日は審議がされ



第 43 回世界遺産委員会での「百舌鳥・古市古墳群－古代日本の墳墓群－」の審議状況（2019 年 7 月 6 日）

ませんでした。

登録の決定は翌日の7月6日土曜日だったわけです。この日の審議の時間帯は15時から18時だったのですが、LICはびきののアトリウムで、パブリックビューイングをやっていたわけです。登録決定の瞬間は、バンザイの歓声が上がりました。一生懸命取り組んでいただいた市民の方もたくさん来ていただいていたので、ガッツポーズをされている方もいらっしゃいました。また、パブリックビューイングはいろいろな会場で行っていまして、あべのハルカスでも開催していました。登録のお祝いは、ハルカスの頂上のヘリポートで行いました。

古市駅東広場でのパブリックビューイング
（2019年7月5日・金曜日・20～23時）

LICはびきの アトリウムでのパブリックビューイング
（2019年7月6日・土曜日・15～18時）

世界遺産として、何が重要なんだっていうこと、どこが評価されたかっていうことです。大きい古墳だけではないんですね。大きい古墳もあって小さい古墳もあって中くらいの古墳もあって、それらが一つの場所に固まって存在しているんだと。それが、当時の社会構成っていうか、社会の状態を反映しているんだっていうことが評価されたわけです。日本には大体16万基、古墳があるって言われているんですけれども、その古墳時代を、今回の世界遺産に登録された49基の古墳が代表しているんだ、そういうことで、世界遺産の登録になったわけです。

また、埴輪とか葬石とか、あるいは埋葬施設の形、墳丘の中に安置されている棺、副葬品なども評価されてですね、葬送儀礼がそこで行われたんだと、その古墳がお葬式の舞台になっていたんだと。そういう特殊な事例なんだということも評価されたわけですね。

さらに、東アジア全体で大きなお墓を作っている事例はあるんですけれども、その中でも、前方後円形の墳丘ですね、特異な形、幾何学的な形なんかも評価されて、世界遺産になったわけですね。

もう一つは、先ほど誉田八幡宮の話を出しましたけれども、そういう精神的な、祭祀といいますか、お祭りが、ずっと続いてるんだと、この点も評価されたというふうに聞いております。

「百舌鳥・古市古墳群」は、皆さんご存知の通り、1600年の間、残ってきたわけです。現在は、これらの周辺はもう都市化して、町並みの中に残っているんですけれども、こういう状況の中でもこれが残ってきたんだということも、外国の委員国から評価されたというふうに聞いております。実際、世界遺産委員会でも、委員国からは称賛の意見しか出なかったというふうに聞いております。

世界遺産委員会を構成する委員国は21ヶ国あるんですけれども、時間の関係で6ヶ国の

発言で終わったのですが、それはすべて称賛する意見だったとのことです。議長がもうそれで止めて、あと反対する国があるのならその反対意見だけを言ってくださいという感じになったらしいです。反対が出なかったということで、結局審議が始まって10数分で、世界遺産登録が決まりました。

世界遺産委員会の後にありましたレセプションの席で、日本代表のユネスコ大使がこんなことを発言されたというふうに聞いています。「日本の中で、これほど高い評価を得られた資産はかつてない。1600 年の間、崇敬の念を持って守られてきたことが高い評価につながった」ということです。

そこで、禰宜田先生の講演の中で、イギリスの事例をいくつか紹介されていました。世界遺産といえば大きなブランドというのは、禰宜田先生もおっしゃっていたんですけれども、あまりそれを、「世界遺産がここにあります」とか「ここに来てください」とか、大きく広告というんですかね、そういう宣伝をやっていないところがあるとお聞きして、すごいところもあるんだなと思って聞いていたんですけども。その点を、もう少し説明していただいてもよろしいでしょうか。

（禰宜田）

報告の時にも言いましたけれども、特に世界遺産だということで、観光客に来てもらうというような仕掛けをしていない事例もあるということを紹介しました。そういう世界遺産もあるんだっていうことを知っておくのもいいかなと思ったんですね。

禰宜田 佳男 氏

そうは言いながらも、今、日本に限らず世界各国で世界遺産の登録を目指しているところは、やはり観光に何らかの形で寄与して欲しいという思いで世界遺産登録を目指していることも事実としてある、と聞いています。現実的には、観光目線での登録となることは仕方がないと思います。

日本では、文化財保護法が改正され、文化財の保存と活用についての新たな方向性も出てきています。「百舌鳥・古市古墳群」も世界遺産になった以上、観光の観点からの対応は欠かせないことだと思います。けれども、ただそれだけにシフトしてしまうと、足元がすくわれるんではないかということも強調しておきたいと思います。

やはり世界遺産となった古墳群は自分たちの地域の宝であるという意識、その宝を後世に伝えていくという意識も必要です。その両立が図られるよう「百舌鳥・古市古墳群」を保存して活用していくことが重要なことではないかと思います。

（伊藤）

どうもありがとうございます。世界遺産はですね、やっぱり観光という側面がどうしても目に入ってくるんですけれども、世界遺産の第一義は残すっていうことなんですね。次の世代に伝えて残していくんだっていう、これが第一義になっているわけですね。禰宜田先生の

ご発言は、胸に迫るものがあります。

次に、中井先生にお聞きしたいんですけれども、先ほどの昼飯大塚の整備ですよね。地元の方、あるいは子ども、中学生小学生の子どもを巻き込んで整備を行われたというお話だったんですけども、実際それをやるっていうのは大変だったと思うんですね。

その苦労といいますか、「ここが大変だった」、「ここが課題だった」、あるいは、ごめんなさい、「ここが失敗したんだ」というところがありましたら、ぜひお聞かせいただければと思います。

（中井）

中井 正幸 氏

はい。学校との連携というのは言葉で表すのは簡単ですが、やはり学校は学校の都合がありますので、やっぱり先生同士の会話が非常に重要だと思いました。

私どもの職場には、学校から割愛という形でしばらく数年、社会なり国語なり、美術の先生が来てくださっていますので、その先生を通じて学校にいろいろ働きかけをさせていただきました。学校は何を求めているのか、やっぱりそのニーズを的確にとらえませんと、行政が思いのまま、勝手に学校を利用するように思われてしまいますので、そこの食い違いがないように。

一番共通するのは、学校の先生も、やっぱり子どもたちに、本物に触れさせてあげたい、やっぱり体感、体験をさせてあげたいんですね。

そういう時一番、課題にぶつかったのは、そこへ行く足ですね、バス代という、やっぱりお金の件が、非常に課題になりました。学校にはそういう予算がありませんので、私どもの方の予算をつけて、そして学校から現地へ来る、そういうことをやりましたし、当初は文化庁さんからも補助をいただいて、そういうことをやりました。今ちょっといろんな事情があって、単独でやっておりますけども。そういう話し合いなり目的なりそういうことが必要じゃないかなと思いました。

（伊藤）

ありがとうございます。私も行政にいて、小学校や中学校の児童や生徒とお話しすること、子どもさんの前でも話をすることがあるんですけども、なかなか難しいです。

やっぱり学校の先生と、どう会話をするか、意思疎通を図るかっていうのは、やっぱり一つ大きなポイントなんかなというふうに思いました。

今３人の先生方に講演の内容の補足みたいな形でお話をいただきました。次にここで、今日は市民の立場でご参加いただいています谷水さんからも、お話を聞きたいと思っています。谷水さん、四十四の会の活動などを紹介していただければ、と思います。よろしくお願いします。

（谷水）

これは「英語でガイド」っていう研修なんですけども、この講師の先生を選んだ理由っていうのが、日本の心と外国人としての心っていうんですかね、外から見た気持ちとの両方わかっていらっしゃる方で、日本に 20 数年もお住まいになっているので、とても日本が好きな方なんですね。

「英語でガイド」の研修（四十四の会）

ただ英会話を学ぶんではなくって、どういうふうにしたら、外国から来られた方をおもてなしできるかっていうような気持ちも込みで、一緒にお勉強させていただきたいということで、目線もやっぱし両方お持ちなんですね。

なので、大変和気あいあいと、冗談もすごくおっしゃいますし、勉強のこともちろんですけどもそう言って、皆さんがなんて言うんですかね、英語に対して、バリケードを作らなくて、ちょっと踏み込んで、気持ちよく入っていけるような研修をしていただきました。

これは 3 回やりまして、それであとまた今年もやりたいと思っていたんですが、世界遺産になりましたのでね、皆さんちょっとガイドの方がお忙しくなって、なかなかこれできてないんですけども、ぜひこれからも続けていきたいなと思っている研修の一つです。

これは子どもたち、1 歳から中学生の子どもたちに、その古墳ですね、先ほどコスモスとかを植えている外濠のところのご説明をしていただきましたけども、あそこの場所で、今年もコスモス植えていますけども、そこのコスモスのところで、写生をしました。

「うけつぐ古墳　まもろう古墳」（四十四の会）

それから大王の古墳ということで、想像ではありますけども、大王ってどんな感じかなっていうようなことで描いてもらった子もあります。それから、小さいお子さんたちは、お母様と一緒に拾ったどんぐりなんかを貼って、どういうふうに感じてるかなっていうようなことを描いていただきまして、これは近つ飛鳥博物館で展示させていただきました。

そして、これの反対側の壁面にはですね、6 年生の生徒さんたちが書きました、すごく立派な、いろいろな古墳に対する思いなんかをつづったものを…、こっち側の写真はないんですかね。すいません、それと同時に展示させていただきました。

（伊藤）

ありがとうございます。谷水さん、四十四の会の取り組みについて、今お話をいただいたほかに、どのような取り組みをしておられるでしょうか。

（谷水）

もう、言い尽くせないほどたくさんやって参りました。一つ一つ言いますと、もうすごく自慢話になってしまうんですけども、私たちの気持ちとしては、とにかく世界遺産になってから、そのまちづくりにどう貢献するか、私たちが、世界遺産になったその古墳だけじゃなくって、そのまちづくりを活かすのにどうつなげていくかとか、それから子どもたちにどう伝えていくか、というようなことをやっぱり中心に考えてきました。

なので、いつも会議なんかでね、最後は、子どもだよねっていうことになるんですね。どうつなげていこうか、大切なのはやっぱり子どもたちで、それをどういうふうにしたら、お母さん方も含めて、住みよい町になるか。それから、市民の数が増えていくかみたいなこともね、いろいろ考えてやってきているんですけども。一つ一つ言いますと長くなりますけども、大体そんなことです。

（伊藤）

ありがとうございます。今、四十四の会の活動の概要を説明していただきました。

そのほかにも、来訪者の方々へのガイドですね、これについても、ボランティアガイドとして活動されている、NPO法人フィールドミュージアムトーク史遊会さんや、羽曳野まち歩きガイドの会。こういった市民のボランティア団体の人たちが、ガイドしたり、古代史講演会を開催したり、あるいはまちづくりを考えたりということで、いろいろな取り組みをやっていただいているという現状もあるわけです。

それでは、次に古市古墳群の現状を踏まえて、将来に向けた保全とか活用について、先生方のお話も聞いていきたい、と思っております。

その前に、羽曳野市の取り組みというんですか、世界遺産に向けて、どういうことをやってきたのかっていうことを、まずご紹介したいと思います。先ほど翻訳田先生の講演の中で出

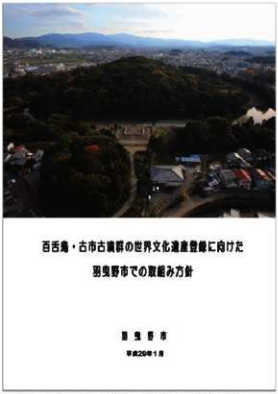
ガイドボランティアの活動
（NPO法人フィールドミュージアムトーク史遊会）

ガイドボランティアの活動（羽曳野まち歩きガイドの会）

てきました「取組み方針」、こういった冊子があるんですね。これは市のホームページでも公開されています。この「取組み方針」、9つほど、取り組みが書かれています。

例えば、周遊ルートのこと、駐車場整備のこと、ボランティアガイドのこと、交通手段の整備についてとか、その他もろもろ9つの方針が挙げられています。その中でやっぱり一番課題になっているのは駐車場の問題。あるいはトイレの問題。また、ガイダンス施設ですね。先ほど禰宜田先生のご講演にもありましたように、羽曳野市には、ガイダンス施設っていうのは、そんなに立派なものはないんですね、そういったガイダンス施設の問題なんかがあります。この「取組み方針」の中で、基本的に進んでいるものもあれば、今言いましたように、少し止まっているものもあります。

ここで、羽曳野市の取り組みについて、ご紹介をしたいと思います。まずは、応神天皇陵古



「百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録に向けた羽曳野市での取組み方針」平成29年1月

史跡古市古墳群 応神天皇陵古墳外濠外堤の菜の花（4月）とコスモス（10月）

墳外濠外堤での花畑ですね。コスモスの植栽を行っています。ちょうどコスモスの花が咲いているところが、外濠の跡ですね。禰宜田先生もおっしゃっていたように、もう圧巻の一言です。人が立っているところは、外堤と言われている跡ですね。木が生えているところは、応神天皇陵古墳の内堤になるんですね。春は菜の花を咲かせております。先ほどのコスモスもそうですけれども、市民の方にもに来ていただいて、満開になったら摘み取っていただこう、花を持って帰ってもらおうという、そういう取り組みもやっております。

先ほど谷水さんのお話にも出た、小学生のレポートですね。このレポートが、大阪府立近つ飛鳥博物館の地下や、羽曳野市の陵南の森公民館の歴史資料室で展示されました。羽曳野市立高鷲小学校の6年生の児童が自分の一押しの古墳を調べて、そこにどう行ったらいい

のかとか、見るポイントは何なんだというのを、自分で写真を撮ったり絵を描いたり、あるいはマップを描いたりして、こういったレポートに仕上げてくれています。

さらに市の取り組みでは、幅広い世代の皆さんが楽しんでいただける催しを行っています。これは「古墳 DE るるる」というイベントです。「古墳」は、ある意味、ちょっと専門的といいますか、敷居の高いところもありますので、皆さんに、いろんな世代の人にわかってもらおうということで、こういうイベントもやっております。古代衣装のファッションショーや子どもさんの作った埴輪の粘土人形、あるいはいわゆる「古墳グッズ」のご紹介もやっております。また、地元の企業さんとも一緒になって、ご協力をいただいて、スーパーで、古墳グッズの販売のコーナーを設けていただいたこともあります。

先ほどトイレの問題と言いましたけれども、トイレは作るのがなかなか大変で、場所

「わたし達が調べた古市古墳群」（高鷲小学校６年生）

古代衣装ファッションショー（「古墳 DE るるる」）

埴輪の粘土細工（「古墳 DE るるる」）

古墳グッズの紹介（「古墳 DE るるる」）

の確保も大変、お金もかかるっていうことで、すぐにできないんですね。どうしていこうかと考えたときに、協力していただける店舗、飲食とか、物を売っておられるお店にご協力いただいて、「自分のところのお店のトイレ使ってもいいですよ」、あるいは、「ウォーキングマップあります」や、「ようこそ百舌鳥・古市古墳群へ」というステッカーを掲示していただいています。トイレについては、とりあえずこういう形で対応していこうということで、ご協力をいただいてやっています。

こういうことを今羽曳野市ではやっているのですが、やっぱりなかなか進まないところもあってですね、今日はその辺を、細巨田先生にいろいろ教えていただければ、ご意見いた

地元スーパーでの古墳グッズの
販売コーナー

店舗入口でのステッカー

だければと考えています。ガイダンス施設については、困っているところも正直あります。綱宜田先生は、何かいい知恵みたいな、例えばこういうふうにしたらどうか、ということがありましたら、教えていただければと思います。あるいは、見通しなども含めてお話しいただければと思います。

（綱宜田）

すみません、答えはありませんけれども、「取組み方針」ができて、この中では、「ガイダンス施設は長期的計画である」ということしか書かれていないわけですね。羽曳野市は、ガイダンス施設がないという現状はあるものの、世界遺産登録が実現したわけですから、これから具体的にどうするかを考えないといけないと思うんですね。

世界遺産となったことで、今後のことについて市民の皆様方の意見を聞くパブリックコメントのようなことなど、何かあるのではないでしょうか。ここにおられる皆さんが、今のままでいいのでしょうか。そうではないんだと思われるのであれば、その声を、市長さんとか、教育長さんとか、あるいは市議会議員の先生方とかに話をしていかれることもお考えになられたらと思います。その必要性についての市民的な盛り上がりがあるといいですね。四十四の会や個人からも、そういう声を上げていくっていうことからまず始めてはいかがでしょうか。今のままでは、なかなか行政は動きにくいのではないでしょうか。

（伊藤）

なかなか手厳しいご意見です。今の綱宜田先生の話を聞いて、大きく首を振っておられた谷水さんなんですけれども、発言させろということで、アイコンタクトもありましたので、ぜひどうぞ。

（谷水）

はい。本当にね、これはね、はじめから言ってることなんです。まず駐車場、トイレ、この二つはね、もう本当に 10 年前から声を上げてるんです。反対にお聞きしたいんですけど、

どうしてできないんですかね。【笑い、拍手】

（伊藤）

そうですね、まずはやっぱり予算面だと思うんですけれども。駐車場については、「百舌鳥・古市古墳群」、特に古市古墳群はですね、古墳のある場所っていうのは、もう周りに民家が建ち並んでしまっているんですね。また、決して大きな道路がその周りにあるわけではなくて、どちらかといえば、狭い、見通しの悪い道路なんかが、網の目のようにあるわけですよね。そこに駐車場を作るというのは非常に困難で、今羽曳野市で考えているのは、市役所の駐車場を使ってくださいと。それは無料で使ってくださいということで、停めていただけるようにしているんですね。

幸いなことに、羽曳野市役所というのは、そこから歩いて古墳を見に行けるような距離にあります。応神天皇陵古墳にしてもそうですし、墓山古墳やその付属古墳、陪塚ですね、その一つの向墓山古墳も、市役所のすぐ裏にあるわけですね。あと白鳥陵古墳と呼ばれている、羽曳野市の名前の由来になったって言われている、そういった古墳も歩いて見に行けますので、とりあえずは市役所の駐車場に停めていただくと。それは、一般の車両もそうですし、観光バスも事前に予約の上そこに停めていただくように、今、工夫をしているんですね。

あと、バスについては、駐車というわけではないのですが、乗り降りするための、乗降場というものを設けています。これは先ほど紹介しましたコスモス畑、あるいは菜の花畑のそば、応神天皇陵古墳外濠外堤と呼ばれている、その近くに作りました。そこから歩いていただいたらもう、繃冝田先生のお話にもありましたように、巨大古墳を体感できるビューポイントにもなっていますし、応神天皇陵の拝所の方にもすぐ歩いていける。そういった場所に、バスの乗降場は作っております。

今回の会場である LIC はびきのの前に、峯ヶ塚古墳という古墳がありますが、その古墳にすぐ行けるように、あるいは少し足を伸ばして白鳥陵古墳に行けるように、「LIC はびきの」の野外スペースである「交流広場」にもバスの乗降場を作って、利用をしていただこうと思っています。既存の施設をなんとか使うように、そういう方向で考えています。谷水さん、まだ何か言いたそうなお顔ですけれども。

（谷水）

お気持ちはわかります。伊藤さんを責めているわけではございませんが、いろいろなお考えもあると思います。皆さんもいろんなお考えを持ってはると思います。そこを百歩譲ったとして、トイレ、もう数が少ない。でも、これは増やそうと思えば増やせるんじゃないんですか。駐車場にどっとバスが来る。でもそのバスの数に対応するだけのトイレの数がない。これは、すごい、本当に困った問題やと思うんですね。なんか、トイレだけでも、増やすという計画はあるのでしょうか。

谷水 みさ子 氏

（伊藤）

具体的な計画は、現在のところありません。「検討中」になるんですけれども。しかし、別に手をこまねいているわけではないんですね。先ほど近隣の店舗の協力をいただいているとご紹介しましたが、このようなことで協力をいただけるお店を増やしていく方向とですね、あるいは、これも検討中ですけれども、自動車にトイレがついた車、移動式トイレみたいなものがあるんですね、それを周遊ルートの幾つかにセッティングできないか、ということを検討しています。

やっぱりお金の面で、なかなか難しいところもありますが、何とかそのトイレ、あるいはガイダンスの施設も、見に来られた方ががっかりしないような、そういうことをこれから考えて、やっていきたいと思っております。なかなか怖い視線で見ておられますけれども…。

（禰宜田）

すみません、質問ですけども、羽曳野市には、市長への手紙とかなんか、そういうのはないんですか。

（伊藤）

市長への手紙ですか、えっとですね…。

（禰宜田）

答えはいいのですが、問題を顕在化させるための一つの手段です。かなり過激なことですが、そう思ったのは、文化庁にいた時、いろいろ意見が来ました。今の施策に対して不満のようなこともありました。それに対しては、基本的に全部回答しないといけませんでしたが、「そういう考え方もあるんだ」と私自身が勉強になったこともあったのです。

だから、やったとしても、すぐに改善はしないと思います。どういう手段がいいかはわかりませんが、できることはそうないでしょう。「問題がある」ってことを市民の方々から行政に伝えることは、皆さんもできる数少ない手段ではないでしょうか。

いずれにしても、観光客が増えているのに、ガイダンス施設がなくて、そういう不便を強いているんであれば、ということが前提です。その実情を、何らかの方法で明らかにするのはどうかと思ったもので。【拍手】

（伊藤）

そうですね、電子メールで、市に直接そういうご意見をいただくっていう、そういう方法はありますね。

世界遺産の担当部署にも、意見や要望がやっぱり来るんですね。案内板の数が少ないんじゃないか、あるいは、古墳に行く道に迷っておられる方がいらっしゃって、どうしたものかという、そういったご意見なども電子メールでいただいたりしています。また、史跡地、先ほど応神天皇陵古墳外濠外堤の花畑を紹介しましたけれども、あそこで晩に花火を打ち上げたりとかで困っている、どうにかして欲しいという、そういう意見や要望はメールで来るんですね。また、直接私どもの部署に来られて、意見をおっしゃる方もいらっしゃいます。

禰宜田先生もお話の中で触れられていましたが、回答するということは必要なんですね。

その回答を行っているのですが、どうもやっぱり同じようなフレーズや文言になったりします。私どももその回答を行っていて、歯がゆいところはあります。またご意見があるということでしたら、ぜひ市の方にお寄せいただければと思います。それが力になるのかなと思って、今のお話も聞いていました。

それでは中井先生にお聞きしたいのですが、今こういった、羽曳野市、あるいは他の市でも課題があるのかもしれませんが、大垣市では、来訪者に対して、何か配慮されている取り組みなんかはあるのでしょうか。

（中井）

今のやりとりを聞いていまして、数年前の私がそこに座っているようなそんな気がして聞いておりましたし、両方の言い分がよくわかります。一つの事例を申し上げますと、古墳ではないんですが、大垣には大垣城という、関ヶ原合戦の西軍の本拠地になったりしている場所があり、そこには、外から訪れる方にやはり駐車場もない、お土産を買ってもらう場所もない、情報のインフォメーションをする場所がないという声が、やっぱり 10 年前まで、非常にたくさんあったんですね。

それを一つずつ、克服する切り口を、お城ではなくて、「奥の細道紀行」で知られる松尾芭蕉が、大垣にゆかりがありましたので、松尾芭蕉を切り口に、経済界、大垣の商工会議所、それから観光部局、そして商店街の方、さらに市民の方々が加わって何度か話し合いをして、おもてなしをしたり、駐車場などの問題やゆっくり滞留してもらう場所を作ろうじゃないかという話し合いを重ね、現在「奥の細道むすびの地記念館」という、一つの観光文化施設ができています。

それからもう一つ、今日、資料の中にもですね、それに関連したチラシを入れさせてもらっています。その一つに、「ぷらっと西美濃」というのは、観光部局との連携の一つです。実は大垣は、木枠の生産の 80%のシェアを占めていますので、これを生かした「手形」を作り、それを 500 円で買っていただきますと、市街地周辺の文化施設は入れますし、それから商店街でちょっと休憩していただいたりしながら、そこのお店で土産を買っていただいたり、あるいは、お店の方といろいろお話をしていただくという、そういう文化と観光、商店街の活性化という連携した取り組みを続けています。

最初は文化と観光とは、すごい水と油のような関係のようにありましたけども、そういった長い取り組みをしながら、少しずつお互いの関係がわかり合いつつ、一つの施設を今運営して、そして、今羽曳野市さんが直面しているような課題を一つクリアしているところがあります。まだ、古墳の方はそうではないんですけども。

ですから、ぜひ、観光とか、そういう活性化を目的とした方々との連携を、庁内も横断的な取り組みも必要だと思いますので、そういう外圧的な部分と、内部からの取り組みと、両方いるんじゃないかなという思いをしました。

（伊藤）

ありがとうございます。中井先生はですね、皆さんご覧いただいたように、非常に優しくて笑顔がすてきでですね、私なんかも今までに何回かお話をさせていただいているんですけれども、いつもアドバイスをいただいています。今日も、この席でこういうお話になると

いうのは大体予想はしていたのですが。もう中井先生のお話を聞いてほっとしてしまって、もうこれでこのシンポジウムを終わりっていうふうにしたいなと思ってしまいましたが、そういうわけにはいかないので、ちょっとまた話題を変えます。

今は、来訪者対策といいますか、活用の話でした。活用も大事なんですけども、次は保全について、保全と活用とのバランスについて話を進めていきたいと思っております。

先ほど禰宜田先生の方から、文化財保護法が改正されて、活用にも重きを置くようになったんだというお話があったと思います。その保全と活用のバランスを考えていかなければならないというふうに思っています。そこでですね、世界遺産になったこの「百舌鳥・古市古墳群」の内容に引きつけてですね、ぜひ禰宜田先生のお考えをお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。

（禰宜田）

文化財保護法の改正があっても、文化財の保存と活用はバランスよく行なうことにかわりはありません。観光的な目線によって、史跡の保存がおろそかになるようなことはあってはならない、ということは言うまでもありません。

その前提の中で、通常の史跡だと、指定されたら整備をするというのがこれまでの一般的なやり方だということは申しました。でも、世界遺産になった「百舌鳥・古市古墳群」に関しては、イコモスなどの指摘の中で、あまり整備はせず、今の状態のままで保全していくべきという方向性が示されたという話を聞いているんです。史跡指定されている古墳については、当時の姿に復元するようなことにはならないということは、古墳本体の整備というハードにかかる費用はあまりいらないことになります。そうなると、そのお金をどうするか。繰り返しで恐縮ですが、ガイダンス施設の建設に充てやすくなるのではないかとも思います。その施設で、市民の皆さんに古墳群の価値を知ってもらう取り組み、外国人にも理解をしてもらう取り組みを行なうことではないでしょうか。

他の史跡とは違うんだということについて、ご認識をいただきたいと思います。観光的な目線からもガイダンス施設が必要になるかも知れません。いずれしても、保存と活用のバランスを取っていただくということをお願いしたいと思います。

（伊藤）

ありがとうございます。世界遺産になった古墳ですね、構成資産と呼ばれている古墳を、簡単にはなかなか整備できないんですね。世界遺産に登録される一つの要件で、「真実性」というのがあるんですね。復元するのはいいんだけれども、あるいは整備するのはいいんだけれども、きっちりその真実性を担保して整備しなさい、あるいはその上で活用しなさい、ということになっています。

今まで、例えば築造当時の形に復元したりということをやっていたんですけれども、それが簡単にできない。そういうシチュエーションがあるっていうことをご理解いただければと思っております。

次に、保全と活用のバランスについて、中井先生にお聞きしたいんですけれども、大垣市はどのように保全をして、その上で活用していくっていう、基本的な考え方はございますでしょうか。

（中井）

実はあんまりないです。ないんですが、思うに、やっぱり都市計画がしっかりしていないと、将来この地区はどうあるべきか、この文化財をどう生かしたまちづくりをしていくのかということが語れないんだと思うんですね。ですから、教育委員会といいましょうか文化財部局の方は、やはり都市計画部局の方と横の連携を強くして進めていかないといけないなというのを強く思っています。

また活用については、たまたま今日は公有化した整備の話をしました。でも多くの世界遺産の古墳は、中に入れないというお話を聞きましたが、私は「活用」というのを、多くの方は、そこで何かをしなきゃいけない、何かイベントや行事をすることが活用だというふうに、少し思いが偏っていないかなという懸念もちょっとしています。僕は、活用という話をする場合は、公共性を高めていくことが活用なんだというふうにお話ししています。

まさに古市古墳群では、先ほど、四十四の会さんのいろんな作文とか、スケッチですかね、写生大会とか、ああいうのはもう活用そのものだと僕は思いますので、そういうことを、継続していく、広げていくことが、羽曳野さんの文化遺産の活用の一つのお手本になるんじゃないかなと思いました。

（伊藤）

ありがとうございます。なかなか、ハードの整備とか、そういうお金のかかるような活用はやっぱりすぐにはできないんですけれども、地道に進めていける取り組みがあれば、それは積極的に進めていきたいなと思っております。

次に、時間の方が押してきたんですけれども。「百舌鳥・古市古墳群」は世界遺産登録を果たしたわけですけれども、実はその登録のときに、いくつかの勧告が出ているんですね。世界遺産委員会で決議されているわけです。つまり、宿題を出されているわけです。それがいくつかあるんですけれども、その中で、私がちょっと注目しているところがありまして、「管理システムにおける地域住民の関与のあり方について、公的なあり方について検討してください」と。「管理システム」というのはおそらく、先ほど議論しておりました、保全や活用のことを指すと思います。この保全や活用について、地域の住民の方が、どのようにして公的な、フォーマルな形で関与していくのか、そのあり方について検討していってください、こういうことを宿題として出されているわけです。

これも、私どももいろいろ考えていますが、非常に大事なことだと思っています。行政だけが世界遺産を守るんだというわけではなくて、あるいは陵墓は現在宮内庁が管理されていますが、それなら宮内庁だけが陵墓を守っていけばいいのかということになるんですけれども、でも本当にそれでいいのかどうか。周りに住んでおられる方が、どのようにそのことを思っておられるのかということも含めて、これは非常に大事な問題だというふうに認識しています。

そこで綱宜田先生の方にお聞きしたいんのですが。こういう、周りに住んでおられる住民の方の、保全、あるいは活用について、関与の仕方ですよね、フォーマルな関与の仕方ですが、私も正直なかなか具体的なイメージができないのですが。例えば、全国的にいろいろ史跡の整備とか、ご覧になられて、あるいは視察されて、何かヒントみたいなものはありますでしょうか。

（禰宜田）

難しいことばっかり…。えっーとですね、これはですね。史跡とか世界遺産も、一言で言うと、市民の皆さんに、プライドを持ってもらうっていうことじゃないかなと思うんですね。そうした人々の心をくすぐるっていうんですかね。

世界遺産の隣に住んでいるってすごいことなんですよってことです。それがどういう意味を持っているのかということを知ってもらうことが重要ではないでしょうか。

そこでは、開発や家の建て替えなど何もできません、というように言うと史跡になったこと、世界遺産になったことに対してマイナスイメージを持つ方もおられるかと思います。そうじゃないわけですよ。そうならないように、まずは行政が、あるいは大学等研究者の方々が、そしてここにご参加いただいた皆さんが、世界遺産とともに暮らしていくことはすごいんだという思いを持ってもらうような取り組みを始めるっていうことじゃないのかなと思うんですね。

古墳の管理って言ったら、芝生を刈るとか、樹木を伐採して綺麗にしないといけないとかっていうことになるわけです。それを草刈りをするという事実にとどまらず、古墳の墳丘が草ぼうぼうだという時に、「どうするんだ」ということになるわけですが、「じゃあ我々で草刈りやりましょう」というようなことになるのがいいと思いますね。そういう行動に移してもらえるような働きかけを、行政や皆さんが進めていっていただきたいと思います。

そのためには、少し高邁な理念のもとに、世界遺産にあまり関心をもっていない方々に「攻めていく…」、「攻める」っていうのはちょっと言葉が悪いかもしれませんけども、そういう地元の方々を増やしていく取り組み、仕掛けが必要になっているんじゃないのかなって思います。

これを実現する方法には正解はありません。情に訴えることを含め、市民の皆さん、研究者、行政の方々がいろんな場を作って、より多くの方々に「百舌鳥・古市古墳群」のことを知ってもらうことでしょう。いろいろ試行錯誤をしていただければと思います。とにかく、サポーターの輪を広げていっていただきたいです。

（伊藤）

ありがとうございます。わざと、難しい質問は禰宜田先生にぶつけているんですけれども。でも、今のご指摘は心に響くような内容です。ぜひ参考にしたいなと思っております。

中井先生にもお聞きしたいんですけれども、周りに住んでおられる方の活躍の場っていうのですかね、活動の場、それをどういう分野で作っていけばいいのかっていうのを、もし何かヒント等があれば、教えていただければと思います。

（中井）

人それぞれの立場、年齢、いろいろ様々だと思うんですね。そういう方々と対話をしながら、そして何を望んでいらっしゃるのか、何ができるのか、そういうコーディネート的な役割をどなたかが、まず間を結んでですね、そしていろんな人と人をつないでいったり、そして、外の人をまた地域につなぎとめたり、何かそういう地道な活動が要るんじゃないかなというふうに思います。

（伊藤）

はい。ありがとうございます。私も文化財の仕事をやっていて、人との対話といいますか、お話というのは非常に大切だなと思っています。お話をして、理解を求める、理解を得るという、それが大事かなと思っています。それでもう時間のほうが押してきましたが、地域住民の方と一緒にやっていく、あるいは市民の方と一緒に盛り上げていくということが、大事なんだということが、見えてきたと思います。

そこで、白石先生にですね、ぜひエールを、あるいは応援のメッセージがあれば、ここでいただきたいなと思っているのですが、先生よろしくお願いいたします。

（白石）

エールというよりも、今の問題ですけれども、一般市民の方々、住民の方々の、この世界遺産の登録運動から、さらにその保全活用についての関与の問題ですが、これについては、私は、羽曳野市の場合、一般市民の方々が、非常に頑張って十分関与しておられると思うんです。例えば、この四十四の会でもそうですし、細見さんを中心とするフィールドミュージアムトーク史遊会などもあってですね、「百舌鳥・古市古墳群」の重要性に関する啓蒙活動とか、非常に熱心にやっておられるんですね。私、幾つかの市町村でいろいろお手伝いしていますけれども、市民の方々がここまで熱心にやっておられるところっていうのはそうないんじゃないかと思うんですね。ですから、私は住民の関与については、羽曳野市はむしろ理想型に近いんじゃないかというふうに思っています。

ただ、先ほど来問題になっておる、いろいろ取り組みの遅れの問題が出ておりましたが、私もその点はですねえ、確かに今回、「百舌鳥・古市古墳群」が世界遺産になったわけですが、それを抱える堺市さん、藤井寺市さん、それから羽曳野市さんと比べてみるとね、比べるのは申し訳ないけれど比べてみるとですね、堺市は、その中心部である仁徳天皇陵古墳と履中天皇陵古墳の間に立派な大仙公園という史跡公園を作っておられます。そして、そこに堺市博物館という、ガイダンス施設としても十分、役に立つ、立派な展示施設を作っておられるわけです。それから駐車場なども整備されている。それからお隣の藤井寺市も、シュラホールですか、立派なガイダンス施設、博物館施設も持っておられるわけです。それから史跡公園として、津堂城山古墳の整備を着実に進めておられます。

それに比べると、なんていうか、羽曳野市の取り組みは、やっぱり、遅れていることはもう、事実として認めざるをえないと思っていたんです。ところが今日初めて、羽曳野市でもと言ったら失礼ですけれども、羽曳野市さんもですね、これ平成29年1月にですね、この世界遺産登録に向けた羽曳野市での取り組み方針というのをまとめられて、これちょっと拝見すると、もっと前から準備しておられたようですね。ともかくこういうものをまとめられて、何が問題であるかはちゃんと洗い出しが終わっているわけですね。ですから、あとはこれをいかに実現していくかの問題ですね。

それについては、やはりこれはいろいろ理由があるんだと思いますが、堺市、藤井寺市に比べて、その点、羽曳野市はやはり遅れているんだということを自覚をされるということが、それがまず必要じゃないかと思いますね。何をやるべきかと、何をやらないといけないのかということもよくわかっておられるわけであって、これを着実に実行する方向に努力していただければ、それが最もいいんじゃないかというふうに私は思います。

（伊藤）

ありがとうございます。私も羽曳野市の担当職員として、今回のシンポジウムで非常に耳の痛いお話もたくさん出ました。これはこれで受け止めなければいけないと思います。着実に取り組みを進めていこうと思えば、行政だけでは、やっぱりできません。ぜひ市民の皆さんと一緒になって、世界遺産の保全、あるいは活用を行っていきたいと思っています。

伊藤 聖浩

今日のこのパネルディスカッションは、まとまりのない形になってしまって、進行役の私としては非常に心が苦しいところもあります。しかし、今回の議論を機会に、諸課題を再認識して、表題の通り、まちのグローイングアップができればと思っています。

本来なら、そのまちづくりについて、もっと深い議論をしたかったのですが、もうそれをする時間もなくなってしまいました。これは、もう私の司会の進行の不手際という他はありません。本当に申し訳ありませんでした。しかしながら、世界文化遺産のあるまちをどうしていくのかという、そういうことを考えるきっかけになったのであれば幸いだと思っています。

これで、パネルディスカッションは終了したいと思っています。会場の皆様、そして先生方、本日はどうもありがとうございます。この後、世界文化遺産推進室の室長の南里より、皆様に一言ご挨拶をさせていただければと思っております。

（南里）

こんにちは。世界文化遺産推進室の室長をしています南里といいます。本日はお集まりいただきありがとうございました。先ほどのパネルディスカッションのまとめというか、感想をここでいうことになっていたんですけれども、私も聞かせていただいて、大変心が苦しい思いがしました。

実は私、アゼルバイジャンに大阪府や堺市、藤井寺市の人たちと一緒に、事務方として行っていまして、世界遺産委員会での審議の様子も聞いてきました。で、各国の委員さんの意見なども聞いてきたんですけれども、私たち、行く前は、世界遺産登録される前は、これだけ資産である古墳の周りに家がびっしりと立ち並んでいるような状況というのは、どんなふうに思われるだろうかと、それがマイナス要因になるんじゃないかというふうに心配していたんです。けれども、実際に蓋を開けてみると、各国の委員の方は、そんなふうに周りに家が建っていて、さらなる開発圧力があるもとで、この古墳が 1600 年間守られてきた、それがすばらしいんだ、口々にそういう評価をしておられました。

そういう意味では、今回の「百舌鳥・古市古墳群」の世界文化遺産登録の最大の功労者というのは、この、古墳の周りに住んでおられる市民の方、守ってこられた市民の方なんだなというふうに、改めて思いました。

で、今日も、先生方、皆さん口々におっしゃっておられたように、羽曳野市は本当に市民

の方は、頑張っておられると。いろんな場面で、先頭に立って走っておられる。今後も、未来永劫、「百舌鳥・古市古墳群」を守っていかないといけないんですけれども、それを先頭に立って、市民の方は、やっていっていただかないといけない。けれどももうそれは十分に、それをしようと思っていただいている、私たちがむしろ、一緒にやらせてくださいとお願いをしないといけない立場なんだなというふうに今日、このパネルディスカッションを聞いていて思いました。ぜひこれからも、一緒に取り組みをさせていただきたい、一緒に、この「百舌鳥・古市古墳群」を守っていきたいなというふうに思いました。

本日は長時間になりましたけれども、最後までご参加いただき、どうもありがとうございました。パネラーの先生方も、本当にどうもありがとうございました。本日はこれで終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

「世界文化遺産のあるまち」に向けて…　（古市古墳群を南西より望む）

「百舌鳥・古市古墳群」世界遺産登録記念シンポジウム
世界文化遺産のあるまちへ　グローイングアップ
ー「百舌鳥・古市古墳群」の過去・現在・未来ー
シンポジウム記録集

令和３年３月31日
羽曳野市教育委員会 世界遺産・文化財総合管理室 世界遺産課
〒583-8585 大阪府羽曳野市誉田４丁目１番１号
TEL：072－958－1111
Mail: sekaibunka@city.habikino.lg.jp

緑が映える白鳥陵古墳
撮影：保田 紀元

世界遺産 World Heritage Site of Osaka
百舌鳥・古市古墳群
Mozu-Furuichi Kofun Group